



宗因用ひらきて貞徳の風と云ゆ人もの信
 徳の風むつしとてその風の風と云ゆ人の風も又
 於於山原傳ゆて於し其風もゆり其不易流
 流を風とて取捨す其風もゆり其不易流
 一々枝葉あや作を根とて其今を流ゆ其宗
 因の風と云ゆ人も其信の体と云ゆ人も其信
 信の風と云ゆ人も其信の相續とて其信の風と
 云ゆ人も其信の相續とて其信の風と云ゆ人も
 其信の相續とて其信の風と云ゆ人も其信の
 相續とて其信の風と云ゆ人も其信の相續と
 是枝葉あや作を根とて其今を流ゆ其宗
 因の風と云ゆ人も其信の体と云ゆ人も其信
 信の風と云ゆ人も其信の相續とて其信の風と
 云ゆ人も其信の相續とて其信の風と云ゆ人も
 其信の相續とて其信の風と云ゆ人も其信の
 相續とて其信の風と云ゆ人も其信の相續と



一
 丁

- 一 付乃事 系 始乃事
- 一 四時の風乃事
- 一 物乃事
- 一 尚乃事
- 一 凱の文乃事
- 一 作乃事
- 一 又乃事
- 一 浮乃事
- 一 白作乃事
- 一 死乃事
- 一 一句の自他の事
- 一 真人乃事

- 一 排余白の事
 - 一 発乃事
 - 一 虚実乃事
 - 一 半白乃事
 - 一 句作乃事
 - 一 廻文物の名白乃事
 - 一 句合十二番 翁評 并考墨
 - 一 傍題 斥題 落款 有文 無文
 - 一 一休ノ秋詩 鉢敲ノ由来 翁評六回 言葉
 - 一 短冊 赤墨 夏 回シメメタ 花歌袋ノ事
- △能名ノ文字 卷末ニアリ

皇言葉
七ツカニツカ
頭カ用捨
而乞歌
発白

和哥発乃徳
正親白
童田何立入ノ句
白作ノ論

行脚乃掟

私ニ曰昔ヨリ仇浩ノ奇枕スル夏ヲ行脚トイフハモト
禪語ナルヲ公祖禪ヲコノメシヨリ仇浩オノツカラ
禪意禪語ヲカリ用ユルコトノアルヨリカクハイヒナラ
ハセリ往昔仇浩行脚ノ風俗ヨカリモ時タニカハル
掟ヲ書テシメシタルニ今テノ世ノ惡風俗ナルニハモ
トモナクテハ叶ハヌコトナリ 又曰行ハ旅行ハ義
脚ハ虚ノ字ナリ唐宋ノ俗語ニシテ禪家專ハラ
用ヒタリ定掟ハ法度ナリト云々

第一条

一宿ニ再宿スベカズアタメガル是ヲ思フヘシ

此件ハ行脚ノ大ム子ヲシメシタルナリ行脚トイヘ

ルモノハ初テ存子タリシ人ノ宿ニモ過モナレ
ハ心得アルヘキコトナリ或ハ知己ノ家或ハ母子キ
ニアツカリシ人ノ家ナトハ時ノヨロシキニ順フベシ
佛家ニ桑下^{サウカ}三宿ヲ許スズト云樹下石上三
宿スベカラスト云コ、ロナリ今時ノ行抑ユノ
コトヲ忘テトバメオルニ強テ宿シ或ハ長滞
留ニウトニゼラレ、タタヒ欲クヘキコトナリアタメ
ザル甚ハ樹下石上ノコ、ロナリ

第ニ条

腰ニ寸鉄タリトモ帯スヘカズスベテ物ノ命ヲ取
コトナカレ君父ノ讎アルモノハ門外ニアソブベシ
以件ハ殺生戒ヲ背トシタル掟ナリ寸鉄トハ

ハツカナル切物相口小サ刀ニテモ腰ニサスナト也モシ
傳ニ刀劔ヲ帯レバ自然ニ殺氣出テ堪忍ノコ、ロ
スツナク時トシテハ人ト争論シ終ニハ人ヲ疵ツク
ルニ至ルヨシ人ナラズトハツカナル劔ヲタノミテ行
マシキ所ニモユキ夜道ヲフミテ犬狼ヲオソシズ
身ニ害ヲマ子クフ有サレトモトヨリ刀劔ヲ帯
ベキ人ナラバイカゼム此条ハ只能階行抑ノ境界
ニテズリ命諦能階行抑ノ者ハ風流ヲ背ニテ
世外ニアソブモノナレハ刀劔ノ用ナシ物ノ命ヲトル
コトヲ戒タルハ佛家ニカキラズ凡人ノ大戒ナリ
君父ノアダル人ハトモニ天ヲイタ、カズナレハ没ミ
テ身ヲ風雲ニマカスヘキ理ナケレハ我徒ニアラズ

カレド其人ト交ル時ハ自然其氣ヲ即ケタキ
マウニ成テ終ニハカタキウチノ即太刀ヲセ子
バナラヌマウニナル也サルガ故ニ交ハラサルニハ
シカシトナリ門外ニ遊ブベシトハ其人ト交ハルカ
ラズト云ユトナリ

第三條

衣類器賤トモニ相應ニスベシ過タルモ足ザルモ
シカラズ

世ノ中ノ人風流ト云フヲ取遠テ富貴ナル
人モワサトキタナキモノヲ着シテモシラヌ
器ヲ用ユルヲ面白キ莫ト心得タルハ大キ
ナルヒガユトマシテ貧賤ナルモノ、羨服ヲ着シ

羨器ヲ弄ダハヨカラヌコトナリ只衣身ニ
叶フ所ヲ考ヘ衣被相度相應ニスベシ驕ウツクラス
文マシカ白ナラサルハ君子ノ風ナリ文中子カ被ウツク儉
ニシテ潔イサギシトイヘルヲシタフベシ

第四條

眞鳥獸ノ肉好テ喰フヘカラス羨食珍味ニフ
シル人ハ他莫ニフレマスキモノナリ其菜根ヲ咬テ百
莫ヲナスヘキ語ヲ思フヘシ

此件ハ食欲ヲイマシメタルナリ口被ノタメニ
カケル人ハ何莫ヲカナシエムカニ鄙ヒ聖ノ志ニ
アラムハ媮欲ヲモ戒シムル莫ヲ得シ他莫ト
イフニテ百行其戒メナキコトヲシルヘシ其菜根ハ

大根ナリコノ沿ハ呂氏師友雜誌ヲ小学外
篇ニ引タルヲアゲタルナリ宋ノ汪信民ノ
詞菜根ノ如ク無味ノ野菜ヲ咬得マスズル
志ナラハ百夏何ゾトカナシ得ズラムト也此語
ヲフカク味ハ其身世栄ヲウラマム心ハ
起ルマシトナリ

第五條

人ノ靈^{モト}ナキニ己カ向ヲ出スヘカラス^{ノミ}塵ヲソム
クモ^モカ^ラズ

此件ハ驕^シ悻^シヲイマシメ謙^シ讓^シヲシエタルナリ
何^レ莫^クモサシ出ガコシクウケバリタルハアシキト
ナリ

第六條

嶮峻坦ノ塚タリ^ニ刑^ノ勞^ノ念^起スヘカラス
オコ^ラバ中^途ヨリカヘルベシ

此件ハ道路ノ教ナリイカバカリ峻^シ難^シノ塚六
月冬^ノ天^ヲ侵^シテ丘^ノ窟^ニニヨ^リノ^ボリ^ナリ^ニ月^ノ
深^ク雪^ヲ陵^テ北^國ヲ^分行^ニ刑^ノ勞^ノ念^ヲ
オ^コス^ナト^ナリ^ニ鵬^ニ風^雲ダ^ニア^レバ^難義^モ
ス^ナハ^ナク^タノ^ミミ^トナ^ルナ^リ若^クモ^コト^ニ刑^ノ勞^ニタ
エ^ズハ^中途^ヨリ^カヘル^ベシ^トイ^ハル^ハ甚^ク難^ク有^コ
ト^バニ^シテ^ホニ^山川^舊跡^ニタ^シク^タツ^テ今^ナト
イ^ハル^洞ニ^テラ^ミミ^ルベ^シ程^カノ^件ニ^ユヅ^ル
第七條

馬加駕ニ系コトナカレ一技ノ枯木ヲ病脚ト思フ
ベシ

此件モ道ノウヘナリ馬駕ニノルハ或ハ君命
ヲウケテ旅スル人アルハリナキイソギニテ
道行クニコソアレハ命諦行抑ハサル夏モナケレ
バ馬加駕ノ用ナシ唯雲水捨身ノ壞規ナ
シハ足ノトビマル所日ノ暮ル則チ宿トスベシ
馬加駕ニ騎テ道ヲイソグニハオヨバヌコトナリ
一ノ枝ヲ病足ト思ヒテユルノト行ヘキト也

第八条

好テ酒ヲ吞ヘカラス筈應ニシテ固辭シガタキモ
微醉ニシテヤムヘシ礼ニオヨブノ節迷礼起罷ノ

戒祭ニ昨ヒモロキヲ用ルモ醉ルヲニクミテナリ極ニオクル
ノ訓アリツシメヤ

此件ハ飲酒戒ナリ好ノ一字心ヲツクヘシ此字
ハ常ニスキテ害ヲマ子クむハシナルヘシスベ
テ人ノ災ハ好ムヨリオクルモノ也吟酒量リヤウ
有尼好ム念ヲイテシメバ唯系量ヒニテタラ
ニ極ハハカリナケレトモ礼ニ及バズト云論語
陽堂キヤウタウノ篇ヲ引テシメタルナリ迷礼
起罷ノ戒トハ佛家ノ語ナリ迷ヒ礼レ
ハオユスト云和トナリスベテ極ヲ戒ル古又ハ
佛家ニカキテス儒ニモ禹旨ウ極ヲニツム
ナドイヒ范魯ハニ魯コウ魯シツガ狂藥ニシテ佳味

ニアラズトイヒルモ皆誼ヲ戒メタルナリ
サレド能ホトニシテ止マバ乱ニ及フコトハ右
ニシケレト高陽ノ徒終ニ此物ノタメニ
身ヲ亡ス憎ムヘシ戒シムベシ歟示ニ昨ヲ
用ト云ハ漢國ノ禮ナレト我國ニモ其風
右テ田舎ワタリノ氏祭秋多示ナトニ耳
誼ヲ造リテ吾ハ昨ノコ、ロナルヘシ誼ニサケ
ルノ例アリトハ唯俗語ヲ引テサトシタル也

第九條

船錢茶代忘ルベカラズ

此件モ道路ノ狹ナリカ、ル微細ノコト
ニモコ、ロヲツクヘシトナリ

第十條

夕ヲ思ヒ且ヲ思フベシ且暮ノ行脚ハイフハ好
ミザル莫ナリ人ニ勞ヲカクルコトナカシニバノ、
スレハ疎セラル、ノ意ヲ思フベシ

此件ハ交^{カウ}熊ノ教ナリ我友且暮ハ且遇
ノ厚シアママコリナラムトイヘド且遇ニテハ前
後アハヌマワニオボユナホ我思フハ是ハ初
ノ一宿ニ再宿スベカラズト云ニ同夕ニ綾
羅錦繡ノ衾ニ卧シ且ニハ散衣一鉢ノ
姿ト成ヲタノシムベシトナリ明暮同可
ニ長滞^{チウ}留^{リウ}シテ人ニ勞ヲカクヘカラス論
語ニ云ル如シバノ、スレハ疎セラル、ノ語ヲ思フ

一 べシトナリ

第十一條

他ノ短ヲアゲ己カ長ヲアラハスヲナカレ人ヲ
ソシリテ己ニホコルハ甚賤キ直ナリ

此件モ交熊ノウヘナリモムゼニガユウ文筵モムゼニガユウ座右ノ銘ノ
相ナラヒニ礼記ヲ引テシメシタルナリ蘇
也のソハ唇舌カク一秋カルトヨメルモコ
ノ直ナリ

第十二條

能談ノ外雜話スヘカラス雜話出ナハ居眠リテ
勞ヲ甚良フヘシ

此件ハ仇席ノ捷ナリ雜話スレハ人ノ白業

ヲサマタゲ終ニハ雜話キソヒ起リテ仇諧
マブルナリ

第十三條

女姓ノ仇友ニ親シムヘカラス師ニモ弟子ニセ
イラヌコトナリコノ道ニ親シヤタセバ人ヲ似テ
傳フヘシスヘテ男女ノ道ハ別ヲ立ルノミナリ
流リウ湯タウスレバ人チイ若チイスヘカラスコノ道ハ至シユイテフニキ一無適
ニシテ成スヨク己ヲ省カクルベシ

此件ハ男女ノ別ヲ明シタルナリ男女ノ別ア
リトハ孟子ニ出テ堯舜天下ヲ治メ玉ヲ五
倫ノ一ナリ書經五典トイヘリキラヒヲサクル
ハ人ノ身一義我李下ニ冠ヲ正サズ瓜田ニ

履^{ソツ}ヲイレスノ戒メフカク思フヘシコノ道ハ
仇^{キウ}階^{ケイ}ヲ云ナリ主一無^{キウ}適^{トク}ハ教ノ一字^{イチジ}注^{チウ}御^ギニ
シテ唯^{タラシ}コノ道ヲ主トシツシミ守^シ他^タ更^シニオ
カサレユクコトナカレトナリ已ヲ省^シルモ儒^{ニウ}家^カノ
大^{ダイ}戒^{ケイ}ナリ已ハ吾^ニ私^シノ心ト云コトニテ公^{コウ}ケ^ケニオシ
出^デス道理^{ドウリ}ニアラヌヲ云公^{コウ}道理^{ドウリ}ノ正^{テイ}シキ^キノ
外^{ガイ}ハハグキスツヘシトナリ

第十四条

主有物一針一卅タリ尼取ヘカラス山川江澤
ニモ其主アリツトメヨヤ

此件ハ偷^ユ盜^{トウ}ノ戒ナリ誠ニ人ノ大^{ダイ}戒^{ケイ}ナリ山川
江^{カウ}澤^{タク}トイヘトモ皆^ミ主^{シュ}アレハ天下^{テンカ}主^{シュ}ナキモノナシ

一針一草ノワツカナルモノニテモ取^{トル}ナト云ハフカ
ク偷^ユ盜^{トウ}ヲイマシムル語^ゴナリ

第十五条

山川旧跡ミタミクタツ子入ヘカラス私ニ名ヲ附
ルコトナカレ

此件モマタ道路ノ按^アナリ何ニテモ常^{ジョウ}ニ
遇^ユルコトヲタメ戒^{ケイ}メタルモノナリスヘテ已^イ雅^ヤ
人^ニノ名^ナヲトラムトテ大^{ダイ}嶽^{カク}ニヨギ大^{ダイ}澤^{タク}ヲ
ウカヒサマハノ禍^ワニアヘルタメグヒスリナカラ
ズ是又風^{フウ}雅^ヤ天性^{テンセイ}ニタガフ故^コナリ私^シニ名^ナツク
ルコト本^{ホン}ヨリ朝^{チウ}家^カノ制^{セイ}ヲ私^シス沿^ユ上^{ジョウ}ノ至^シ
怨^{オン}ルヘシ

第十六条

一字ノ師恩タリ忘ルコトナカレ一句ノ理ヲメニ解
セスシテ人ニ教ユルハ已ヲナシテ后ノコトナリ

此件ハ師身ノ戒ナリ貞徳翁ハ孟蘭盆
尊ニ一字ノ師一言ノ教ヲウクル人ヲ教示
シリトカヤ好テ人ノ師ト成コトハ尤戒ムヘ
シ曾論ニ七聖人ヲカク戒シメタリ一句ノ理ヲダ
ニ解セスシテ人ノ師トナルハ今ノ世ノ何宗近
角宗近皆シカ也此階ノ風俗治昂ニアシ
クナリテ今ハ師モナク学ヒタルコトモナク
人或ハ昨日今日ヨリ此階ニ入タル人ノタチ
ニ千宗近魚ニ成テ人ヲソシリ已ヲホユル

昔越人カ集ヲツクリシヲダニ初心ノ集ツ
クルコトヲ笑シタリ昔ノ初心今テノ宗近ニ
セバ孰イタムヘシカナシムヘシ

第十七条

一宿一飯ノ主モオロソカニ思フヘカラズオシバ
テ媚福フコトナカレ如是ノ人ハ世ノ奴ナリコノ
道ニ入モノハコノ道ハ交ルヘシ
此件ハキユエタルマナリ

以上

十六篇

不易流の論

理屋格式鉢

算用合乃坪

白乃其

白乃福

常乃加

常乃加

常乃加

常乃加

常乃加

常乃加

理屋

白乃 苦
未来を返却
心を放し
景色の一擧
心乃一擧

○ 不昂流行論

不昂乃白

疲擧も阿婆をど花のよせ山
筆やとりのおもそ風の音

流りの白

其東のちてたさこまかろる
筆のちこりや梳みし

編妻をかろり梳みし

不昂流行ノ論サマノ有トイヘ氏遠ク解高ク解テ初
心ノコ、ロニハ落カタカルヘキノミ多ク又或人曰不昂流行ハ甲
乙ナシク元白血脈相續ミテ出生スレハ不昂流行ノ取ハ自然
依ハリテ男トナリ女トナルカ如クロヨリ出ルト等子里ヲ走ルモ也
アナカチ不昂流行ヲ尊キモノモアラスト云リ是又氣先

ハカリニシテ不易流行ノニツ全カラスコテモハ其形
自然^後其情^リカレモノナシハ甲乙ノ論ニ及フコトモ愚評^{月居}
不易流行^子ノ子^果不易ノ風俗ナリ流行ハ時々^流ハスル
化自在ノ形ナリタトハ不易ハ衣冠ヲト、人テ靴カカリ
流行ハ我家ニカヘリテ其冠ヲ取捨テ今日ノ用ヲホシイテ
ニスツルカコトモ ○寂寂^寂言

古地や蛙をさす可水乃音 翁

そのまきの木槿ハ馬ノ喰まらり

コニ白蕉門ノ真象ナリツトメテ此へ

ナモやとあしきやくのふ月と梅

時々時々こゝろをいへる、

ふもあもあゆまぬ女のおつゆらふ

初志くも猿も小菖をほけあま

うらふよ至ニト思フモノハ道ニ入ヨリ常ニ吟テ且暮ニ

龜鑑トスヘシ 又曰

能諧ハモノヲアハレムコトヲ要領トス自他ノ觀相ハサナ
ナリモノヲアハレムコトハ草木ノ霜ニ合鳥獸ノ寒暑
ニクニシムヤサレハ道ニ取タルを思ヒキタナシト思フ
念起ラハ一白ニムスフコトアタハス不使ト思フ心ハ別
風雅ノ一白ナリサリヤトテ句ヲトニ觀相ヲノミセヨト云ニ
アソクフヘシ
去来正風ノ大立鬼ヲ向 祖翁曰能諧ハヨク美物ニ
應スルコトヲ上句トスヘシ 祖翁ノ答則美物ニ應心
スルナルヘシ
正風ノ能諧ハ美古不易ノ句作ニシテ千字本ニ不括
ヲナスコトハアレト祖翁ニモ延室天和ノコロハ異作
モ又多ク異作トハ流行ナリ流行トハ一時ノノ
意不風ナシハ数年ヲ経サレトモ廢ルモノナリ仙化

曰其少用没して後漸三年ナルニ其ハ風ヲ云モノナ
シト嗟嘆天ナセリ 古来曰流行ノ向ハ已ニツノ
物救奇有テハマルナリ 政客多ク及器物等ニ
至マテ時々ハマリアルカコトシト云ハ正風ヨリ憂
風スルモ又流行ナルヘシサレハニヤ正風ト流行トハ
水ト氷ノ如キ氷ノ水ニナラサルナニニシ一ニシテニナリ
モトヲ知ラスシテ憂風セハ作ニスニ或ハ理屋ニ落或
ハ流シテ終ニ名モツカヌモノトナラシ
家隆ハ寂連ノ誓ニ寂連相具シテ大夫入道ノ和
哥ノ門第ニナリキ 彈門申サレテ曰此仁未未ノ哥仙々
タルヘシ見泰ノタヒ難儀ナト云トヲ向ハリスイワモ哥
詠スヘキマサシキコハイカニナリト向ハルトテ感シ
申サレシトナリ
能潜ノ正シキ心ハ正風ニ有正風ハユミナク自然ノ實
情ニ得ルモノナレハ万物ニヨク應スルヲ旨トス万物
ニ應スルモノハ則真實ヲ云ナリ一以貫之ト聖

人ノタマヒシモ真實ノコトナラスマ孝臣忠臣ナリ仁トモ
義トモナリヨク万物ニ應スルナルヘシサレハ祖公翁ヨリ已前
ハ與ヲトルモノヲ詭諧ト唱へ来リシヲ祖公翁コトヲ着
破シテ真實無妄ヲ以テ能諧ト唱へ正風ヲシメ
シ申サレシナリ 誠ニ能諧中與ノ翁ナリ 邪恒貫之再
ヒコニ来ルトモ意ニオイテ何ソ咏ヲイレシ天地ノ造化
モトヨリ常ナシ能風モ又一風ニトマラス變化ナスモコ
トハリナカラ祖翁ノモトメ玉ヒシ道ヲ捨テハ其餘ハ
邪路ト思フヘシ

蓬蓬其小きくくや 伴翁の初便 翁

旧の花をさしけりみ 其角
如是目出度心ハメテタキ心ヲセキニ嘆スヘシ詩ニ嗟嘆咏
嘆アリ哥ニ餘情有能諧ワツカニ十七言マシテ嗟天
コトヲ先トスヘシ
向々ユミニ落入有作ニスムアリニ作三作ニアソル有

歌ノ文字ニスカル有見立句ヲ好ムルアリ俗中ノ俗ニ
アソヘルアリ理屈ヲツ子トスルアリ是等ノ人ハ門外ニ
ソフニヨシナキク争ヒヲモトムルコトハツラハシ
古哲曰アソフ又ユミナルモノハ足下ヲ走ル珠ヲヒロハスニテ
珠ヲヒロヒタル人ニ行アメリタルコト
又曰好ま句ヲセント思フモ病ナリメツラシキ句ヲイハシ
ト思フモ病ナリ人ニ上キト叫レント思フモ病ナリ
タ、モノノ、ニ對シテ自己ノ樂タルコトヲモテハ自
然上キトモ人ニ叫ルヘシ環ニキ趣向モ出ヘシヨキ句モ常ニ
タノシムヘシ

詠諧問答 去未ヨリ贈晋氏其分用書ノ内

故翁真羽ノ行跡ヨリ都一裁エ玉ヒケルニ當門ノ詠諧
ステニ二變ス瓢猿篋是ナリ其後又一ツノ新風ヲ起
サル出灰俵續猿ミナリ
句ニ于字不昂ノ姿アリ一時流行ノ姿有是ヲ兩端
ニ教ヘ玉ヘ氏其モトナリ一ナルトモニ風雅ノ誠ヲトハ
ナリ不昂ノ句ヲシラレハモトタチカタク流行ノ句ヲ
マナヒサレハ風アラタマラスヨク不昂ヲシルモノハ往々ニ
シテウツラストエトナシタモノ、一時ノ流行ニ秀々
ルモノハ只己カ口竹臭ノ時ニ逢フノミニシテ他日流行
ノバニ至テ一步モアユムコトアタハス水電ノ清モトニ
リテウユカサレハカサラス汚穢ヲ生スルナリ
亦許六ヨリ落柳舎江贈書ノ内
不昂流行ニツマヨヒ寂寂本ニクマカシテハ真ノ俳
諧ニアラス舩ヲキカミテ琴ヲ柱ニ懸スルノ類ヒナリ
又曰趣合モウカマス句作リモ出ル以前ニ不昂ノ句
セニ流行ノ句ヲセント云ハ湖南ノ沙汰ナリ哥二十作

有定家西行初ヨリ何作ノ可詠ニトシ玉フユトヲ
キカス詠テ后判者ノ眼有テ一々作ヲワカツナリ
又曰 初心ノトモカラニハ寂寂ヲ客見ヨニ解ヘカラス却
テ其吟テ口トナテ新味ニウツリカタミ
又曰 寂寂ハ趣命言葉器ノ楽弁ナルヲ云ニアラス寂
ト寂シキ句ハ異ナリ 琴ト云ハ趣命詞器ノ哀憐ナ
ルヲ云ニアラス憐ナル句ハ別ナリ只内ニ根サシテ
外ニアラハル、モノナリ言語筆頭ニワカチカタミ
強テイハ、寂ハ句ノ色ナリ 琴ハ句ノ奈情ニアリ
シカレ尺趣命詞モ器モ又エラハスニハアルヘカラス
去来曰 句ハフツ、カナルモイトフマニ唯ツタナキ句古キ句
ヲイトヘリ句ヲウカ、フニ歳ナレモノ有艶シキ有狂賢
ナル有深固アリ平将アリ健在アリ憐ナリアリフツ
カナルアリ潤ハシキ有狂千姿万作有 又風騷有テ
自然道ニ至ル有其次思ハサレハイタラス 其次
思ヒトモイタラス

許六曰 言葉ヲカサリ 寂寂ヲ作リタラニハ真ノ
能諧ニアラス
去来曰 言葉ヲカサリ作ルト意ヲ用ヒ願フト又同日
ノ論ニアラス 又曰 不易流行ハ別ノモノニアラス
唯 同 雅 名ナリ 其 交スル所アルヲ一時ト云 交セ
サルモノ有ヲ不易トワカツノミ
又翁ノヨシト申サレ、句ハ不易流行自然倭ルナリ

子梅ハ娘位をきく妻ハ人のぬ
五月もや物さしいきものし中
椀家貝のたらぬ位居たや菊の花

音なりよの家のあゝ社家の池

凡そ白ヲ思フニ十カ六七ハけ神多し 子梅ハ娘の位
不_レ可_レあそし思へヌルカクテ座禪ノ取合ニテイクタヒ
カ祭_レ白_ニニセ成タルへし中娘ハ娘トカハリ寺ハ庵トカ
リタルにコノ廊ハ内ニテ白ヲヒ子ル時ハ一生は場
ト_レマ_リテ砂糖ヲ蜜漬ニスルカコトし水七流ヲ
ト_レムレハ濁リケカレヲ生ス能備ノ居トコロ施シカレ
又月もハ淋シキモノヲモトメ菊ハ隠道ノ情ニ落余
ノ葉ハ社家神子ノ住所ニコソト趣向ウカシ
ハ千眼一判ノ格式餅ナリ多ハ此神ヲ父白トシ
テ母白ヲ求メウメル白有コノ場イ必タヒモ喰テ
飽へし

○ 竹筭用場

駒亭の本曾や出らぬと口の月

燕乃居なりむらやほとま

此_カ總_リ理_ノ屋_ニ似_テチカヒ有_ロアタリ祭_レ白_ニハア_レト
酒_ノ落_ノ作者_ノ用_ヘキ所_ナラス筭_ヲ用_テ合_セタル
マ_ニテナ_リ望_月ニ逢_坂越_ル駒_ムカヒナ_フハ本_曾ハ二_目
月_ノコ_ロニ_コソ_出ヘケシ 燕_ノヒ_カニ_至テハ出_持家_造
リ_テ空_マト_ヒセヌコ_ロナ_ラハ郭_么ノ物_音ニ寸_尺合
へしコ_ノ白_ヲホ_ヒラ_メテイ_ハ灌_佛ヤ七_日ス_クシ_ハモ
千_月夜_トイ_へル_白ノ類_ナル_へし



句ノ其ニ 并白カウノ夏

春風や城のくかろし長廊下

はれの戸や暑を月よりかつ凡

名りや礎キ出せし波乃と夏

け場ハ其ニニ喰附テ水ノ味ヒ有ユトヲシラス喻ハ
月明カニ一桌ノ塵ナキ海上ニツノ波モナク松柏ノ音
自然タエテ寂莫調タル場ニハ能諧ノ執行スツ
ナシコノ場能諧ナキニハアウ子ト白ハキラノハスル
モノヲトウヘテ一氣ヲ吐モノナレハコノ場キヤリ
落シト去ヘシ雲ハ月ニムカヒテ厚ク海ニ六サナミ
走りワタリテ所前火ノ男ノシユバンノ上ニ狼狽ヲ着
タルモ其場ノ能諧ト見ルヘシ 菜ノ戸ノ月ニ届ノ
暑ヲワスレシ名月ノ一天ニ礎ヲキ入ルヲ隅ナリト
見タルハ古人ノヨメシ猶ニシテ又其後ノ古人ノ子ブリ
タル前ナリカツイヘバトテ元日ニ火ノ物タチ布子着

テ水風呂ニ入モノスキニハアラズ

寂癡ニ白カウノ夏

小刀のそれろし見えぬ接穂ト
子ををりめて草焼借ふ穂穂ト

心サシイヤヒタシ平白ノサマナリ

我里のまほしき時を人々知事をおろくやまも
けしきノ心サシイヤヒトナリ風雅ハ心サシヲ本トストナリ

山はくせをむしりしに接穂ト

穂の秋ソラももゆりや接穂のあり

猿 錐 横 凡

古人曰吾花白去出シトニ砂子マキキテ短冊ニシタメニユトヲ
思フヘシトソ令別スヘシ 祖翁ノ白白カウノ人カウ心ツク
ヘシトソフヘシと思フヘシ

隣ハハるぬア〜あ〜接穂のれ
アサマニキ白作ナリ

その日やあてなりふ出ても西の
鶴やうそく人あつるも秋の暮
見風
白雄

初雪や大なるも笑う門
は何某貴人ノ前ニテ申出せし白ナリイトアサニ

露沾沾是矣ニテ

西行ノ菴もあらし舟ノ舟ノ庭
翁

是大キナル庭ヲ吉野山ニ比シテトクノ清水ヲ飯セシ
西行ノ菴モアラムト申サレシナリ貴人ノ前ニテ猶心サ
シヲタツルカヨシ白宇下ノ白心サシヲ矢フニナカニ

知足の才の物産地かたすふ多狐かゆ

少紀の家や花とくろあぬ脊の戸の雲
翁

大境曰雀ト云ルハ下僂ノ夏ト是大ナル北ナリ

○ 句ノ子バリノ克

樂天もふかハ恋一き花の陰
思ひ出やもま交喰てそま
おるやハハおとらん
風

花ノカケニ古人ノ戀ニキト云ハ耳ミヲミリテ他者モ我
ノ一字ヲ入タルナルハ此ノ字ナリマダ子ハリナリ
貫之業平ハ句論ノ樂天モ恋ト云ハハ句中
ノ字慢心ノ見解ト云ハハ此ノ字枕ハ風雅ノイノキナレハ
善モ悪モ皆其日ノ俳諧ナリ後金襴ニマトリテハ
ツカレタルマセズ子ヲアタメメ一牧ノ菴ヲカツキテハ自然
ノタルコトヲ樂ムコソ自然ノ場ナルヘケレ又思ヒ出マ
トキタナリ置タル所オモヒ出ニアラテクルニキヘツラヒ
ノ五文字ナリま々麦喰手子枕トハカリ云ハ思ヒ出ハ

自然白ノ光ニ有ヘシ又朝魚ノ世ナリト見附タリト云
心ノ子バリ風雅ノ野器ナリ道ヲ此ルヘキ人ノタマサカニモ
言出ヘキ言ノ葉ニアルヘカラス多ハ慈鎮西行ノ哥ニシ
ルヘシ見神ナクハ有ヘカラス 采ノ暮ハ世ヲ逢ヒタルモ
天祥ノ氣ニツマシテ一夜ノ年ヲカサヌル心ツカヒコソ面
白キ風流モ有ヘケレ凡トリテ心マスサヨナト、志ノ
アラハシ来ル市巾ニカクシニシキ器ナリイソカシキ
人ニモキレヨ年ノ暮トイヘル休コソナツカシケレ

桐の葉乃狹て見きまゝの扇の如
是子ハ他門ノ風ニテ正風ノアツカラヌナリ
處 元



常ノカタノ十

元日や人のちるも其とわり
しらくくと扇をかきん異々の如
窮民の花のかきりや八九 月
ずく積りて雨をなひ、雪九げ
常ハ常ノユトニシテ用ユル時ハ向トナリ用ヒサレハアタ
トナルキセルノ四モ百ニモ此ル時ハ錢一文エハナレト錢ハモ
ト骨折タル物ナリコノ場ニ化譚アリト思ハル
二十年ノハテハタヲツイヤスに砂ヲ蒸ニテ飯トスル
カ如シ又切ヲカクニテ愚ニ極フ場ハ途ニタカニ有
此境ニ迷ヘル人多シ

吉野山世家の花を飲々い
澄々



只更ノ論

発白ノ論

篔篹やあちの喜もも二三本
朝の風やよの喜ももニツニツ

桂本屋の自悟て足すつどか

賣家此自悟てとほはどか

温冷ハ時節ノ情ニテ花ト咲葉ト落ルコトハ姿テ
リ有情非情風聲水音マテ其感スル所ヨリ歌トナ
リ発白トナル其感スル所花實濃薄ノチカラ有ヘシ
昔ノニツニツト見えタルハ物色ノ感ナリ篔篹ノ風流
ナシ桂木屋ノ自悟テ見スルハ世中ノ常ニシテ風雅ニ
見所ナシ賣屋鋪ノカマハ志ヲ感スヘシ

寂琴只更ノ論

餅花も折らるるし 吹戸の柳が

夕風よ木の葉吹よ可入はら

宵折タル趣向ナケレハ発白ニナラス 夕トハ

猿啼て木の葉吹こむ入はら

カク葉スル時ハ夕風ハ餘情ニシテ断綿ノサヒニシテ
感多シ旦云自然ノ白ト夕トコトノ白ト似カヨヒテコトノ
外ナリ

秋の穴尾と丸ねをるあはれ

其角

知る君池の心と猿ハ鳴るるり

信徳

是等ハユル自然ノ白ナリ其餘情ヲ思フヘシ
六義云雅ハ夕ト哥ト去リ古今抄曰コレハコトトノホリ
正シキヲ云ナリ定家々由雅ハ思フコトヲ少モ行哥コト
ナク夕トニ初ヨリ終マテ云ツタスナリ

拓せ忍の目よく折て流るるり

園吏

昔年の花らいつく花形もまら

百明

前二出せし状の忠 刻自虎ノ二句ノ餘情ノ場へ至
ハ容易ナリナラス後二出せし枯芦草ノ句モ自然ニ趣
サレトモコノ趣ハ人モ多ク聞クシトモ其ノ用信徳者
ハキヲ放散タル句ナレハ初心ノイタラシヌサカヒナリ是
等ヲ見テモ其次第月有直ヲ思フヘシ

或書曰ニ句案ノ明辨 詩六

祖翁曰発句ヲ案スルニ題ノ中ヨリ案シ出スト云トハ
是ナキコトナリ外ヨリヨ守求レハ板ノタツサニ有直ナリト
云々 吟ハ題ヲ箱ヲ入テ其篋ノ上ニ立上リ乾坤ヲ
タツヌレハ寸テ有モノナリ箱ノウチヲ案スル時ハ人モ
又其一則ニアソハハ同シ道ヲタツヌレナリ 遠國遠里ヲ
行時ハ何ソ人同シカラニヤ 句ハ早竟一取合セモノト思
ヘシトユレト一取合セシヲ上キニ又トリハマスヲ各人ト
ハ云ナリ

又曰俳諧ハ題ノウハサト心得ヘシ吟ハサクフトハカリ

十七文字ニノヘカタシ故ニサクラノウハサヲ撰録トリテ
云トキハ一句自然不昂ニモ流行ニモカナフナリ

あかしくきて糸摘もつや 郭公 翁

是回季ナニツナレトモトリハマシヨキ故五文字七文字比怪クニテ
耳タスス一句ノオサミリヲ思フヘシ

又曰発句ハ最ノ曲輪ヲ出テ作ルニ曲輪ノ内ニハナキモノナリ
自然ナルハ内ニ有ハ天然ニシテ希ナリト内ヲ案スル時ハ等
類ナル直多ク分ニテ切ナシ外ヲ案スルトキハ句ヲ多ク得
レトモ最ニフシ安キモノナレハ初心ノ至カタキセ居ナリヨク思
フヘキコトナリ

俳諧ハマスキ可ヨリ入ヘシ安キ可手ニ入トキハムツカシキ
膚ハ自然ニナルモノナリ

権中納言定家曰 ヨキ哥ヲ心カクルハ田舎菘草ナリ只
題ヲ讀得ヘシトナリ秀逸ハ自然ニ有ヘシトナリ



一取トムル場 并ワツラヒ有句

組トレ一重リキミれ付る介

組に多し記付る介 小束時

卯の花は娘実るまゝのいかり介

卯の花や娘の眉のかげゆき

句ノ郵不郵ハ物好ノ器量ニ有ヘニ卯の花紅葉
山吹氏一取合ハ本情ニラミ判オロツカナル故一取トムル下
カタニ涙ノマコノカスノトハ其理ノ色々ニ別シタ
ルヲ云ナラニ時雨ノ白ハ其場ノ觀相ナレハ仕立様
アルヘニ卯の花ヨリ生出シタル娘ニアラス娘ヨリ取
合セタル卯の花ナリ喻ハ年先ニテ一取合タルモ言下ニ
ニテ十カ八九ハトモルモノナリ鳥七啼トイハハハハニキ
コエ轉トイハハイサキヨキカタモアアラニ

寂琴木曰ワツラヒ有句 兼一私情ニ理屋ニ只支
但三情ノ論卷末ニ出ス

早もかや何のつげても人たゝら

羽さのやうとねのしぬと涼とたり

別条ニセユトク是巳ノことマユル情ニシテカノ通情録
情ノタツヒニアラス通情ハヨシ私情ハ嫌フコトハ是ナリ

おと魂のにおりりゝ裁れとまきん

是蜀帝と鬼ト云ヨリノ葉ニカタナルヘケレトモ是モ人
ノ弁情ナリ

時鳥啼きもやゆき観たもこ 公翁

是古キ硯箱ト姿ヲ出シテ友ナツカシミ思ハシナリ一句ノ
通情是ニテ一理万通スヘシ
蕉門ニコ、ロサニ有者句々々タツラヘテマスノ、深ニ入ヘシ





アツク場

郭公おろや湖の水乃こ濁り
吟とあやしく人をもふくはききん
手水鉢洗ひ流して子乃るん
手水鉢洗ひ流してつハの花

五月雨ノ少シ晴リタリテ水ノ色サ、溜リタル湖水ノ氣
色喻ハ画ニカケル時鳥ナリトモナクヘキ場前ナリ
近年時鳥ノ白アタ聞伎シトモ大方ハ此白ヨリハラミ
出シタル白ノ多シ是氣色ノ頂上ニシテ一毫モノユル
モノ有ヘキカハ然シトモ一段高キ則ヨリ見下ス時ハ
是十分能遇タル前ト云ヘシ 草ノ花ハ少シキア、リ
ハ取タシトモ是モ十分能場ナリ次ノ白ハ冬枯カシ
シト寂タル庭ナトニキ水鉢洗ヒ流シテト石路ノ花
ノサヒシキヨリモノヲ見出シタル則百練ニテニルヘシ

夕リノ登向ノ事 大鐘ノ説

秋乃良ク尾上乃 折糸はあゆみ

夫秋天ノ玲瓏ト澄上リテ高キ莫此節ニ過タルナシ故ニ万木
ニスツレテ高キ折ノ山ノ尾上ニ立上リタル夫又ハナシテアリ
ト云美ノ夕リ也サテコノ夕リノ夕ル美ニ四ノ義アリ

夕リ 秋乃良ク尾上乃 折糸はあゆみ
夕リ ありけり味留るるる 向河春
不意の 丁稚々 昔水こゆ
成然の 夕リ 夕リ 夕リ 夕リ
夕リ 夕リ 夕リ 夕リ 夕リ 夕リ

其風を皆是依初のきあはるる夕のあまふニアラスコ奇ノ夕リノ夕リ若
喻ハ他家乃 折糸はあゆみ 某ナトノ義ナリ近頃奇人談ニ秋の尾上
上乃折を折糸はあゆみと出セシハ大切ノ義を小のこりあヲヨク味
一ニ寂然ニリリハ後初ニモアミキノ夕ル美ニトテ夕リトキヲ換
モ見工備ル危ハ玄風ニノ夕ル美ニテ白毎ニモヒホリ 夕リノ折糸
ヲミテ知ヘシ

ヌク場

黄鳥も海むいてるけ須廣乃里
鶯乃海むいてるけ須廣乃里
春の風や廣野をうらめしき
春の風をとらめてはるや旅子の春

須廣トイハ名不ノ上ニ立鶯ハ諸鳥ノ頭ニ立能場ヨ
キモノニテ鶯白ナス一羽手柄モ有ヘ然レトモ初ノ白
ハコノ次ノ里ノ鶯ナラハ海ムイテナケトコ方ヨリ
下知ニタル白ナリ後ノ白ハコノ志ヲ又イテコ方ヨリ
鶯ナラハ海ムイテナケト下知セムヨリコ方ヨリ
カナ海ムイテナケト自然ヲ感ニ須廣ニ立ルヲモタセ
タル白ナリ 廣野ニワテノ雉子ノ殻ヲ感スル也
后ノ白ハコノ志ヲ又キテ廣野ナトニテハワテルナト
コ方ヨリ情ヲ付ムヨリハ只一呑ニト一情ヲ出シ

下ニタル一羽ノムラナキ一羽トニルヘシ

みの心まを叶田へまはれ何事

晚九

論曰コノ白伏見ハ情氏ニタラカ又ハ叶田若葉心立ノ
名則ナラハ白ニアラシ唯ミノ心立ノ戻ニ則ニ理屈ヲ
ハナレホノカニミノ心立ノ因モウユカス然モ淀竹田ノ塘ツ
夕七時雨ノ風景ヲモトハセルトソ誠ニ名白ノ場ニ
至テハ半後ノ及ヘキモノニハアラシ

○ 白ノ苦ミ

水菜屋乃飲て居るや其の
親方て寺てを暑者の如

花ノカケニ腰掛ナト折色ヨク取ナラヘテ煮煎花ノ
其ハ濃釜金ヲタキウニテ朝カケヨリ人待空ノホロノ
降出シケレハ折角仕入タル茶モムタコトニナルヲ我
ウチ飲テ今テ日ハ仕合アヒトテ茶道具ヲ荷ヒテ
カレサマヲ見入タル一則志ノ苦ミト云ヘシ次ノ白ハ主カ
ハリ又ハ兄ナトモキカリテ平生ヲ律儀ニ勤タル
男ナルヘシ今テ日ハユトサフ目者曰トテ羊日ノ障ヲ又
スミ心ヤスキ且那寺ナトニテ物喰酒飲ナトスル則
行カハリ俄ニハツシモナフスウツノトニハラクノ時ヲ後
スナト一狂變風ノ命トスル則ナリ

○ 昇あがてあげたハなーは花乃寺の

流なり

○ 未来ヲ取場

巢乃雀陸何りや初さく
尻飛ひ固乃いなとや穂の何とは

千草万木枯ツクミタル頃ヨリ己カ家作ラムト歩ミ
昏ヨケタル一則ニ巢ヲクヒタル雀ナルヘシ春如月ノハミツ
カタヨリ左右ノ枯木ホヒラミ初サツラノ咲出シタルナリ
是モトメスシテ自然ノ景色ナリタル白ナリ惣ニテ白
ハ初サツラト置テ何と相キヲサ必リ得ナカハ丸
ハスルコトナリヨサツラハ未来ニシテ自然ニ取トメタル前
ナリナリイナゴノ白モ来メスシテ自然ト穂ノアタニ
飛アタリタル一則理屋ヌキタル俳諧サ地ナルヘシ

○ 千ヲ放ス場

飛込だますでぞ都乃郭公
まじ冷ぬ尾流りり寺の屋根
コノ白評ナニ味テ知ルヘシ

寂琴ニ

春の夜と探りしゆて志すは危
致けらみ夢の浮橋か所へ
松より糸の糸いと細りり
盗人の銭ねくきと中らるる
虫かや猫の爪と因果経
ちききや女その残の形乃色
灌佛の目と産まはるる

翁
其角
不角
来山
西吟
鹭水
翁

○ 気色ノ白サ白ノ体ヲハカツ寂琴ノ巻ニ看

お妙の月東鳥や花の奥
螢火や吹飛さゆて空は海
秋風やは見もあふりあるむぢり
鳶乃羽もあいらの雲の時か口

寂琴

花乃雲鐘ハ上地ハ浅草
いこももんえや圃への林下
志しととあまの形と出城哉

ハナヤカナル句

○ 漢裁や鸚脛ぬまきて海涼

漢裁や鸚脛ぬまきて海涼
名月やゑそのとち松のか斗

翁
其角
沾蓬
共来
翁

春雨の晴て影共ひのうら

桃賀

フトクダクニキ句

杜宇大竹を〜残もぬ月夜

翁

湖乃ち中より〜五月雨

共来

花盡大ふ〜中ふ影り〜

杉風

ホソクカウビタル句

はきこころあゆ〜

翁

一時ゆ〜

露沾

はきの何〜

大草

艶ニマサニキ句

ぬき〜

翁

罌塊お〜

菊齡

何のよ〜

支考

悲玄ナル句

何のよ〜

翁

名月や〜

山川

可笑句

昌房

初生葉〜

翁

何のよ〜

共来

黄鸝や〜

曲翠

色々テノ句

翁

弁の花や〜

轍士

身ぬ〜

翁

心浪やゆらゆら橋の下おきふ

感情ナル句

塵生

酒の気まといしくか標のまはれおのき

翁

一葉はゆし柿の気ふまはるる

一髪

はくしと寝るるる女のおか

小春

一作有句

床ぬ孫て軒日いりやきり

翁

馬志のまき声も枯地のあし

曲翠

もえきれて紙燭をたぐるま

荷兮

一博

山よりみねを歌くこき雀哉

心あし障をこたわてまの山

夕影やかいさるるやと秋の

取巾着の教法しゆや縄は

角尻巾とら一投ても花の

礼との投てししるよ夏ぬ

念頭は障ハひくれ日せの

藍と毒ふきぬを失ふそこの



心乃句

元日より四日と六日とを連し
夏のおやあやふきえ所の音
ふりやといふ事のおよハ似
着てきてよの念をさふり

右十六世阿高名の他者けめ何やまぬる句
又ハ子服一判乃句集ハみ列出一ハき
新書取事ハ一ハより踏出せハ子服もあや
中ハ巻のハ次今時細積多ハ世阿高の有
をきり次はむハ一ハハハハハハハハハハ
めつハ的ハハハハハハハハハハハハハハハ
たよハ時中有一ハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

芭蕉の巻

枕

雪申巻

寂琴木集

へ 娖情ノ論 并ニ情ノ事 附新古ノ論

古ヘヨリ論多シ娖ヲ先ニ情ヲ后ニスト云々初段ノ下
ナリ情ヲ先ニ娖ヲ後ニスト云々ハ尤諷ナキコトナリ
娖情ハ天地ノ如ク前後ノ論ニマトハス物ノ娖ト已カ
心ト相合スル時ヲ一白ニムスヒテ例ノ自己ノ樂ト
スヘシ
物ノ娖ト已カ心ト相合スル時ヲ

一白ニムスフトハ俳諧ノ出ル雅境ヲ示ルナラム
心得ヘシ

余情ハ深キニシクハナシ一白ノ好悪モ唯ニ余情ノ
浅得ニヨレルナリ通情ハ尤白々ニユセルヲヨシトス
親子朋友バ情ハサラナリ春ノ花ノハナマカニタノ

露路ノモロキナントイツレカ通情ニアラスト云々トナシ
情ハ悪シト云ハ已ノ心ノ情ニシテ聞人ナキヲ云情ヲ
キラフ證句次へ出ス

情トハ言外ニアフルノ意ヲ云淋シキトイハスシテ
淋シキヲカキリナシ涼シキトイハスシテ涼シキオモム
キヲ云

スヘテ句ヲ案スルニハ趣向ヨリ入ルハ可ナリ 詞道具
ヨリ入ルヲアナカキヲハス又好ムヘカラスイカニト云
ニ情薄ケレハナリ

俗情ト云ハ心ノキタナキヲ云外面ハ釈迦孔子ヲモ
奴僕ノ如ク思フ形容ニテ口ニカセテ人ヲノミリ
内心ハ色ニ耽リ妻妾ノホタシニ苦シニ金銀ヲ

ムカホルヲ專一トナス鹿皮羊實ノモ是ナリ
是等ノ人口戈ヲ以テ言フム氏終ニハ俗情ヲ
吐出スモノナリ 證句有

詩哥連能トモニ思フ述ルモノナレハツムニイト
マナク十七字ノ上ニテ我俗晴ヲ見透カサルハ
ハツカニキコトニアラスヤ竹窓三葉云榮名
厚利ハ世ノ同シク争フ所ナリ是ヲ求テ得ヘ
カラス是ヲシリソクルモ又得ヘカラ^ス求テ得ヘ知
カテカルコトハ人ヨク是ヲモル退クルトモ又得ヘカ
ラサルコトヲ知ル人ハマレナリ若是ヲ知ル人ハ
俗情ヲマカレム

詞情新古

古有言云情ハ以新為先詞ハ以舊可用云々

定家曰詞ハ三代集ニ出ヘカラス 俳諧モ又意

ヲ新シクスルヲ專用トナス詞ハアラタニ作り出セル

ヲ嫌フ或曰俳諧ニハ俗談平話ヲツカウトモ

何ワツルニカルヘキ答曰俗談平話トハ歌連哥

ニツカハレサル詞ヲモツカウト云ナリ且一句ノ白ツ

クリニモヨルモノカラ 俎氏モモ氏兼サ迄トモ

云是ヲ俗談平話トハ云ナリ哥連歌ニツカハレサ

ル物ヲモツカウト云ナリ俗中ノ俗言鄙言ノ

コトニアラス又新シキコトニモアラス證句アリ

詩ニ待語アリ文ニ熟字アリ歌ハ本ヨリ俳諧

ニ俳語アリ祖翁和哥ノ道ヲ季吟ニマナシ

儒ヲ素堂ニ聞仇休ヲ宗因ニ及花明有テ
新詞ハヨカラノモノト思スカ故ニ去来ノ森ノ花ヲ
花ノ森ト顛倒セルヲカ、ル細ユシテ、世キト割シタ
マシ共来スラカクノ如シイハシマ文七首程文ニテ新
詞ハ云ヘカラス

許六曰上午ニハ仕損シ有ヘシ下午ニハ仕損シ
ナシ仇休ノ底ノヲケタル時ハ新古チカ、ハラス
底ノヲケサルモノハ新古ニカ、ハリテ仇休自由
ニナラス故ニ云解ニ新詞ヲ得トスル是カナラ
ス仇魔ト思フヘシ立鬼ハ新ニ夕詞ハ古キニマ
サルハアウシ

證句

あのをぞらといふつらさを待便哉 公卿

鹿の音も一人の顔見ろ夕可ぬ 一髪

如是ノ姿情ノ前後ニカ、ハラサルヲ知ルヘシ

谷川や柔葉伐るそく、秋の暮 益青

今掩し叶み実り有り夕涼 柙居

是等ニテ風姿ヲ知ヘシ風情ノ句ハ次ニ有

拈枝ト一鳥乃堂すりり秋の暮 翁

寂トイハスニテ寂情カキリナシ

秋ハきぬる多ふハ庭よりりしはよきぬるに
てそふ人もや 寂情尤深ト

渡りゆくてと深の花のそく流下 凡兆

涼ニキ情カキリナシ石のきりけり流るる柳ハ
きりりしとあそむるありつる

野さしを心よ風の志むるあり 公翁

捨此掛合下ノ行御ヲ思ヒ立玉ヒ時ノ句ナリ
是等ハ皆通情ニシテ中人揚ヲ断ヘシ

秋のしほし七日の東の明やまは 猿 雖

ゆるらめの湯波あやまの陸の道 鼠 弾

中々よ子をうつそめ人 壯の暮 肅 山

昔年の程ゆる人乃あふる 和 及

是等ノ句ニテ通情ヲ示ルニハ
アラス姿ナクトモ通情ハヨシ情ハ嫌フ姿情ノ
論コノ旨ヲシリテマトウヘラス

くらやまー 思ひきる 付指の恋 越人

去来抄云 蕉翁体 笑ヨリ 此句ヲ去送テ曰心ニ

俗情有モノ一タヒロニ出スト云コトナシカシカ風雅コ

ニ至テ本情ヲアウハセリトナリ 喻通情ナリトモ

俗情ヲキウフ又定家歌ニウマフニセラモヒバズラ措ノ

其の因を人よぬくせし 兼ては 兼ては 兼ては

くわーぬくせし 是俗情ヨリ出シナルニ

和を結くは 是俗情ナリ

賽銭も用急 兼あり 兼の表 去来

祖翁曰花ノ本トハウナシス名所ナルヤ古人モ亦

ノ花トユフ申伎し詞ヲ細ユミテカハル控キコトイフ

ヘカラス

川ワリ天の川系り 嘆 其のその中り 氷のさし

千薩 小金井ニテノ風吟ナリ 月又コニ有テウケ

玉ハル 凌世ノ今テ花ヲ雲トヨミ 出ルハ古キノカキリ

ナレトモコロアウタナレハ人々 皆臭しハハル

或書者曰

世上ニ新シキモノト今メカシキ物ト取チカヒ伎ナリ新
キ物ハ成ホト昔ヨリ有来テ人々ノ見残シ取残シタ
ルモノナリ晋子カ衣更ニ

越後やきぬぬらゝきや衣更 其角

句論白作等徒取ハマシタリトイヘトモ是等ハ晋
子ナトセ又白ナリ是今メカシキ白ナリ尤連句ナトハ
有ヘキサマナリ晋子ハ江戸ノ宗匠蕉門ノ高弟ナリ
是等ノ句ヲ新シト初心ノ者心得誤多カルヘシ

初雪やい川大佛のけしらす 公箱

大佛殿建立ハ今メカシキ極ナレトモ斯古キユト万里ノ
相遠ナリ初雪ニ初ヨキ取合モノナリ初ノ字ノワヨミ

誠ニ名人ノキツマナリ

夕々しけハ持孫さめや 西ふと 丈草

ムツカシキ句ナリ萩氏ノ風雅ニマ

妙ちくろいせよ花を五巻一貝 丈考

翁ノ錢別ノ句ナリ花實トモ大方ニ兼侍然モ取ハマシ
得物ナリ難シテ去ハ実ウスリ今メカシキ白ナリノ見
ユル故ニ言外ニ意味有句少ニ世ヲ侮フ生得ナリ

唐の地や花を拈きし 山嵐雪

相撲取あゝゆや杜のからき 々

月弱ニシテヨハク弱キニ仍テ羨ニキ様ナリ上三冊
青ヲヌリテ色トリメレハ世俗ノ目ニハ真ノ錦
ノユトニ

心柳や 雲もあらぬの色

枕隣

花実イマダニカトセス然トモ枕隣人間ニ生シタレハ
花實有トハ見ヘタリ有時 鐘ひて人を尋よ
山根ト云白ヲ晋子カセシヲ隣隣興行柳ノ折
柄故ニ錢ノ白ナリト心得テ松島ノ方ニ趣タルモ又
オカシ

黄蘗や 雲もふりて春の風

如行

元来杖弱ナリ大カタ仕損之ノ白多シ

流ききりや 長良山

北枝

一ノの原 湯田の橋

世俗ノ耳ニハニホウシタヤヘ仕シトモ根本ノ所ヨリ出サ
ル故ニ浅間ニシテ見サメセリ一白ノ根ナクハ取ハヤシマニ
テ果ナリ

行枕て 食喰ふは 鏡子のま

鼠弾

アラ野ニハ多ク出ラシタレト後少汰少シコノ僧向花実ハ
エラ子トモ折フニ祭台有ニツノ風雅ヲトリウニナサレ
マテカサ意トスル人ナリ

洛ノ和及法師ハ半人ヤト云五文字ニテ一生ヲ誤ラシト

惟子ヲ洗リ流しやる 名残哉

正秀

正秀カ性ハカニ微細ノ風情ニアリテ曾良カ大和路飯
路ヲトメカ子カクハ送り申サシトカヤ

風の地 三七ニ連ル 居さぬまゝ

去来

尾ノ荷分カ 風ヲ百此月の吹ちし後ト申サシハ今
時雨ニハツノリケジモノヲト自一晩申サシヲ何更ハサモ
ヲホヘス他ハ二日ノ月ニ心ヲトメタレハ時雨ハ古今ニ變

セサル^ニ誤^テナ^リフ^ニサレト^クニ^テト云字未練ノ町寧^ナレハ
唯地ニモ落サヌト有^ヘシト申サレシトナリ
翁伴加賀ノ西麓鹿菴ニオハシテ續猿蓑撰集有^シ時其角
ヨリ三四章^ヲ送^ル其中ニ

白雪^ノし^るのきを^とあ^よ飛^ハ鷹^{イカス} 其角

人々感吟^ニテ是等ノ年ツマノ及カメキエトヲ云ハ翁
ハ例ノホメナカ^ラ晋子カコホトノ仇階ヲキケハ玉ヲ振
フ金^ノ聲^ノ作^ヲ米^メ天下ノ人ヲ驚カサントス是ヨリ
五年ノ變化ヲハカラスニ作^ヲカサ子平話ヲ矢ハ三
作^ヲカサ子ハ仇階ヲツキテ其時ハ自己ヲ矢^フヘシト
公翁ハ其年ニ遷化有^リシカ誠マ五年ノ變化ヲマヌ
日々^ノ夜々^ニ作^ヲカサ子^ニテ

^二作 十六宵や剝^レ眼肉の^レ良衣
^三作 懺^ミくら^レ長者乃^レ夢や^レ思^ハ牡丹

^二作 夜水を^くて^て月の^も見^ルル
早^ク^ニ^テ^ハ峰^ノや^レ川^ノ以^テ海^ノと
夜^ノ今^も有^ル神^ハ編^ミを^レ折^ル乃^レ月
梅^ノ屋^ノや^レ出^ル家^ノの^レ脚^ノを^レ寒^ノの^レ衣
袴^ノ知^ルり^テも^レ神^ノノ^レ中^ノの^レ衣
石^ノ風^ノや^レ山^ノを^レも^レ山^ノ寺
石^ノ堀^リと^も何^も物^ノの^レ麻
糸^ノの^レ底^ノの^レ底^ノも^レ砂^ノ味^ノ味^ノ味^ノ
是^ノ等^ノハ^レ皆^ニ作^ニテ^ハ御^能ハ^レ形^ノ語^ナリ^可知^ク々々

沾徳カ判ニテ水ノ上四白ニ極メ玉ハルヨシ水ノ上ハ幽玄ニ
 キユ俗ノヨロコフ所ナレトモ早立見ハイラヌ詞ナリ江ニ
 ヨコタフ方コ、ロヲフソメテ奥深ク聞ヘ俵ルカ許六
 又曰西白ノ上ヲミルニ水ノ上ハ正木ナルニ飯カヨヒテ江ニ
 横タフ方ヨロシカウニカ尤下五文字水ノ上ノ方ヨロシ
 時鳥ト下ニ置タル五文字ハ子カヘリタルヤウニ聞ユ
 板白葉ハ時鳥横タフヤト定メテ五七言ノ間ニ聲ト云
 ナキ故ニ色横タフヤトナリタルトニエタリ水ノ上ハ
 後ノイロムスヒナリトミヘタリ依テ徳カヤヲ得テ
 水ノ上ニ定メ玉フト見エタリ惣別時鳥ノ牡若ト云
 フ下ニ置トキハ上五文字中七文字ノ間ニテ午糸葉回
 ラノ時ハ子カヘリタルマウニナルモノナリ
 野々を横タフ馬引むけよ郭么 公翁
 中ノ七文字ニテ思フマウニ午糸葉マハル故ニ下時
 鳥ヨリ連続スルナリ

サレニ

花見キ〜花あゆゆ〜神の歌 翁
 响りや伝教ス〜か〜 風 國

許六曰上五文字ニ疑フ心ヲ見タシト次ニテ疑カヘスヘキヲ
 明月ヤハ題ノマニニテ疑ニアラス其上翁作例ナリ
 先吟ハ萱塔ノ林扉ニテノ吟ナリ花ニ明ユク神ト明
 月ニカクヤ指ノ自ト云オモヒ吟ノ味ナキト見ヘタリ
 朔壺ヤ〜く〜 翁
 朔壺を〜弱〜や〜火桶外 泥足
 長閑多〜秋〜や 朔壺の中 惟然
 二百トモニイツレニ故カヘテモ朔壺一白ノ眼ナリ是眼
 有人ノスヘキ白ニアラス同立裏同類ナリ

大堰川流々草々〜なれ〜目 翁
 清閑や流々〜ち〜松葉

ふらふらの月をめぐりてはるる塵もなき

翁

大井川アモリ氣色スキタレト夏氣色云カチヒメリト
オモヒ居タリニカ清巖ニテ彼ニチリコム青松葉ト作
リシ夏栢ハカハリタレト同景ナリト人ノイニモイカ、
ナレハ大井川ノ白ハ於ハヘンカ然ルニコノコ口園女亭
ニ拓カレテ白兼ニシタリ是又同景似テ白ノ道ス
ニ同シ夫故前ノニ白捨ハヘリテ白兼ノ白ヲ残シ儒
ラント思フナリトソ共来曰ユノ白ヲ同景同景ナト、
申スセノハ無眼人ト申スモノナリ其故ハユノ白を景
情別々ツナハリテ白兼ヲミル時ハ三白氏別ナリ故
ニ我ハ白ノ兼ヲ月ニミテ白ノ姿ヲミス
圭月苔白日厚々自無塵是ハユレ隱者ノ高像ヲホ
メタル語今園サカ若クシテ陌上桑ノ調有ヨホメ
玉ヒタル吟ナリ兼モ妙ナリ語モ妙ナリ世人世白ヲ
見ルモノ園カ清巖ヲ知ラシ
又彼ニチリナシノ語ハ左大仲カ必非絲與竹山水

有清音ト云ル絶唱モオモハシ園カニ夫ニマミヘサル
貞烈ト大井清巖ノ絶景トニ白ノ同相難テ感
テセナヲアセリアリ

寝琴曰

昔の兼乃乃んせりりりらぬのせぬ

翁

素牛急の表を及せりりらぬの秋

許六

去来曰是同景ナリトツ

挿の挿やきれて鳴やむ蟻蟻

昌房

石く及て蟻鳴やむ月夜が

居行

是等寺ノ白ハモノニオト口キテ啼マミタル類ハ同
ナリ只形容ヨイヘカヘタルマテニテ手挿ナシ是ヲ
同景トモ同電トモ云凡ヨリウマシマサラニユト至
テカタカルヘシ

椽骨ノ事

椽骨トハ同シクニテ
句意ノカハリテ有ヲ云ナリ

ものしハ唇をき——秋の月 翁
一唇や菰か喰ひ——秋の月 許六
此月オニナラヘテ唇ノ秋風是ニテ極骨ヲシルヒ

塩籠の歯くきもき——魚の肌 翁
殻かきそ膝の歯か——峯の月 其角

其角曰世後及特ニテ猪ノ歯白ニハ海人ノ歯白ニハ此等
句ノ一作ヲナシタラフニハ等類ノ雞コメノ有ハカラス
ノ骨ヲ得テ甘キ味ニナツムヘカラス

時鳥啼つゝかこを誦れいたる月の月そのいふ 後徳寺左大臣
有哨の月たふあゆや郭公たこ一帯のりたをえ世 宇治野政大臣
是等ハ極骨ナシタル哥ナリ

人乃牧の鳥追ひりり雀の子 鬼貫
雀子を築も——りり人の牧 大馬
人乃執此焼野の雀子おかりり 暁臺
大馬カ白ハ先吟ニ極骨ナシタル句ナリ 後白鬼貫
カ句ニ及沸ナシタル作ニテ極骨ニカハレリ

鶯のあのお女まや竹の吹 希因
鶯けま——るも海——竹の吹 麦林
うきを海——のきよ誦教き 翁
宋古きも海——心うみそゆく 麦林

同意同作ノ句詠ト云ハ能白ハ両句ノ手柄ニシテ悪
ミキハ両作ノ未熟ナラフニ尤初心ノ者ノ古人ノ句ヲ
作りテ真スニシカシトナラフ駢轡橋ヲ以テ何谷那ノ
下頷ナラフニ

①

一二字ノ置様ニテ句意ノ浅深ノ事

同キル業

并文字アマリノ支

祖翁曰一句ワツカ二十七字ナリ一字モオロソカニ置ヘカラス
俳諧モ和哥ノ一体ナリ句ニ榊ノ有様ニ作ルヘシトナリ

或集ニ

あはれのり人も年よれ初時雨

翁

是一句ノ意解セサル故カク入集セシモノナラム人七年
ヨシトイハサル時ハ風雅ノ榊ヲウシナフ

以燒の孤村も 帰る夕の暮

保吉

或曰コノ句孤村ニカヘシトイハサル時ハ切字ナシト云是又
一句ヲ解セサル人ナリカヘシト下知ヲナス時ハ秋ノ暮ノ寂
々冥しくタル意ヲ損スルナリ一句ヲモ奪セシテ
キル業ノ空 數金カタハフイタヒ 前ノ句ハ年ヲ

シト云ニテ胸中洒々落タルコト光風雪月ノ如シ後ノ
句ハカヘルト云ニテ眼前ノ幽境古松清音アリ是一
字モムサト置ヘカラス句意ノ浅深ニカハルノミナラス
四置マウニテ一句ヲナスキル業ト云モ義理ヲ通ヒ
意ヲ深クセシカタナリ義理ヨク通ヒ句意深クナ
ルヤウニイフ時ハキル業オノツカラ其内ニソナハリテ
有何ヲ別ニ外ニ求メニヤ

く起るを海しつせよ 疎鼓鳥

コノ句淋シカラスル所居鳥トセハ何ヲ以テカ民ノ心ヲ
和ツコトアラニヤ 是常ナリツ子ハタ、コトニテ風情
ナシ淋シカラセヨトキル業ヲ以テキナラニ吹ナラ
ス故ニ五音相續シテ武士ノコロセ和キ 眼ニ見ヘヌ
鬼神ヲモ泣シムルナリ

②

文字アマリノ支 并添字ノ格

もや、或は暴れ、一て盟、よをす、お、 公翁

蒲、云、英、や、と、と、ぬ、あ、の、ま、ゆ、子、 山、店

有、磯、波、の、波、房、か、き、け、け、か、つ、く、海、人、の、い、き、も、つ、き、あ、ひ、物、と、云、ん

吟、ス、ル、ニ、昔、こ、キ、字、ア、マ、リ、ハ、風、雅、ノ、上、ノ、病、ナ、リ、ハ、夕、切

字、ニ、ツ、ル、こ、ミ、テ、文、字、ア、マ、リ、シ、タ、ル、ナ、ト、云、ニ、マ、オ、ヨ、ブ

御、月、や、 ち、や、め、芥、や、 是、等、ノ、文、字、餘、リ、ヲ、キ、ラ、フ

月、お、め、ら、に、 芥、や、河、や、也

カ、ク、云、ト、キ、ハ、言、葉、ミ、ツ、マ、ル、故、ニ、吟、ス、ル、ニ、ロ、ニ、タ、マ、ラ、ス、お

ス、ヘ、テ、コ、ノ、心、得、ナ、ク、テ、ハ、ア、マ、リ、有、こ、連、哥、ニ、三、三、三

ノ、字、ア、マ、リ、ヲ、ヨ、シ、ト、二、四、ノ、字、ア、マ、リ、ヲ、キ、ラ、フ

ト、云、ト、モ、二、四、ノ、字、ア、マ、リ、ニ、テ、七、例、ノ、ロ、ニ、タ、マ、ラ、フ、カ

ル、ハ、ヨ、シ、 二、四、ノ、字、ア、マ、リ、ト、云、ハ

雲、を、も、も、し、人、を、体、む、月、見、也、 公翁

星、を、り、し、を、あ、ま、め、さ、た、の、西、月、の、色、 吞、霞

二、三、ノ、字、ア、マ、リ、ト、ハ

咲、つ、ち、り、つ、ひ、や、あ、き、き、ぎ、れ、圃、哉、 傘、下

ち、さ、い、し、酔、の、さ、か、き、も、ろ、夕、 櫻、 自、槐

古、人、ノ、キ、ラ、フ、ハ、二、四、ハ、雲、ハ、レ、テ、ハ、ト、云、二、四、ナ、ル、へ、こ

語、路、ア、シ、ケ、レ、ハ、古、人、モ、イ、ハ、ス、我、モ、セ、ヌ、ナ、リ、ト、祖、翁、モ

ノ、玉、ヒ、コ、ナ、リ

或、曰、上、三、こ、中、五、こ、吉、下、二、五、四、吉、二、五、四、三、悪、し

豊、年、乃、し、舞、つ、け、馬、を、一、風、り、れ、 如、泉

五、文、字、ヲ、十、字、ニ、シ、テ、一、句、悠、玄、ニ、タ、ケ、高、ク、目、出、度、サ、マ、ナ、リ

又、文、字、ヲ、ア、マ、シ、テ、句、ノ、優、ヲ、ツ、ツ、ル、也

あ、ら、何、も、あ、ま、の、ゆ、を、さ、そ、河、掬、汁、 翁

上、五、文、字、ヲ、思、フ、へ、こ

よし 野山と花の本の間乃花見哉 鳥 醉

上ニヨシノハト石テモシカルヘキヲ一白ノ優ナリト有テ
生前ノ夜話ナツカシ

シノフレト色ニ生ニテリ我恋ハモヤ思フト人ノトフマテ
是等ノ文字アモニテ此ルヘシ

命何事ニ春河リテ花のよしの山 白 雄

生前ノ夜話ナツカシト云人モ又ナツカシ命有テ春有テ
ノニツノテノ字ニテ白ノ優ニナリシノミカ意モ又深
ツナリシナリ

亦くつてあみゆせよや坊う書 翁

吉野山ニテノ吟ナリ文字ヲアマニテ句意マスノフカシ

シヨシノ山ノ秋風小夜フクテ古今をく夜ナリ

テ哥ヲ深ク感シ玉ヒテ我ニキカセヨヤトセキニ申サ
シニナリヤハヨニカヨフナリ

きんりつ寸草の空しめゆぬぬ 嵐 雪

コノ句唱ヤミヌト有テハ夜ノサニニテ感爲ニ扱ク
ナキツルキリノスノ今マナキヲハリヌト晩秋ノ吟ナル
ニテ此ルヘシ

クニシツモ降ルル雪カ三峰カ崎野ノワタリニ家モアラナクニ
是等ノ吟ニテ此ルヘシ

林枝に雪のふりゆくや林のぬ 翁

淋かけけゆく雪のふりゆくや林のぬ 翁

人みれを愛りてを来とく 翁

十六格 小坊よりや松みかくまて山極の吟 其角

十九格 萱子小階洗ひし流るれ叶の吟 曲琴

石瓮勺ノ初ニニ字を入テ字ニ忘ナリ

十五 風月拾ふむさこもつるを油吟 嵩雪



一句ノ琴幸ナル事并有有用ニシテ無用ノ詞更

朝よきとくぬきねさ山のけこちる翁

松島行脚ヲ思ヒタキ玉ヒシヨリ風雅ノ情雁月中ヲソノカセシトナリ夕シマツシテノツキ一白ノ幸ナルヘシ

赤らりし新酒と人乃醒中是記 嵐雪

越人へ挨拶ノ白ナリ初ヨリ女部志ノ女ト云字ニナツと鶯歌ノ鶏ト云字ニヨリテ葉ニ入ルハ詮ナキナリ自然酒ノ醒マスキト人ノマヒリサママスキト言葉ニユモリタル一白ノ幸ナルヘシ

あゝ海や依波り横みよ天比川 翁

是十二文字ニテスミタル白ナリイサカセ有用ノ五文字置タラニハクハニ通ルナリ其ホトクヲ思フヘシ尤有用ナル詞ハ論ニオヨハス

子の義や足の折よりきりし 荷分

子ノ白上五文字ハカナサマナト置タラニハクハニスギルナルヘシ

子とせや松吉小松と成ヨリ大原山の雪乃の月の

子ノ可雪ノ深サヨトアラハクハニスギルト何某殿ノ作セラレシヨリ

又ヘテ委し遇しハ余情ヲ失フ故ニスミノマテニ云ツメルコトヲキナフ又行トカヌモアヒメトハ前ニ云ルコトク雪ノ深サヨト云ツメルヲ雪ノ明ホト云ハ雪ノフカソツモルサマハ自然コセルヘシ



故ニ病日リ衣に海入に荒荒に其意ニマカセテ
ツカフヘシ且云 月ノナ思ヒソ 人ユウウケシナトカソ
和哥ノキル葉依階ノキル葉トテニフハナシ是日ノ
本ノキル放葉ナリヨソ分別ニテカノ俗ニ下ルカス
もしよりもほのしとありし柿葉 貞徳
是等ハ和哥ノ伺ヲツカヒテモ古ノ流行ニテ正風
意ニカナハス

朕や世をとりし鬼乃山かせぎ 春 鶴

カク云トキハ正風ノオモキナリ

古夏古哥ニツカハルト事
ツカハレサル

梅々系やあれもきとて近きもの

清少納言枕草子等ニをツテ近キモノ極楽ト弘
ノ道下有是モトアルハ全其古語ニツカハレシナリ

茸狩や鹿を人及て踏むり

妻恋や鹿を人及て踏むり

前吟ハ別山ト云ふ系論分啼鹿ノト云ル哥ヨリ出タ
ルナラシ 后ノ白ハ鹿遊ヲ獵師ハ山ヲ見ヌト云語ヨ
リ及特ニタル意ナシトモ 鹿ハト及特ニテハムツカシク
且句禱アリ

螢ころみころハものねつし地 曉 臺

その蝶ころみころハものねつし地 古 嬾

あつりや思ひ入るき山もあし 可 都 里

是等ニテハレハ

又此れはさほの河系乃河凡は友中とりて樹のあり

園のあや葉を海とりにて樹 翁

マミノ水ノ五文字感スヘキコトナリ

と紀宮形や花よらふこぬ脊戸の粟 々

是知足軒新居ノ賀ナリ

淮南子説林云 大廈成而燕雀相賀

淋しや花の何よりの豊あふふ 々

撰集抄云中務元輔扇ノ哥ニ首タマフト云前ニ

コノフタツノ扇ノ分猜ニ定リタシハ其外ノユカシカ

リニ扇ノ分トモハ花ノアタリノ深山木ノコナシテ

心トムル人モナカリケリト云云

あらしし日とつまゝもくも秋の風 々

明詩選

秋風吹將暮 古道行人稀

登比微陽色 射我霜中衣

石やーやる表門あらし夕日更 牡羊

源氏常夏の巻ニ近キ川ノ石フシマワノモノヲ御前

ニテテウシマイラス云々 石フシハ舞ノ奥ナリ

まろけやとねの雀ノ顔はきき 一髪

清女枕草巻ニ鳥虫ノ顔ツキイトウツクシクテ

毛アリクイトヨシ

青海や羽白鳥野野赤かーら 忠知

土佐日記シロサキノ松原ヲヘテユツトコロノ名ハ野ノ松ノ

イロハ青ツイソノ波ハ電ノコトクニ見ノイロハスガ

ニ似テ五色ニイヒトイロソタラ子云々

ゆき雲小鳥のききや数ハ序 其角

古今集

ふそよそを新しちかりてむのむすくもゆの状の衣乃月

ふそよそやひめりゆちの地條の音 翁

ふそよそは原かろふと

ふそよそは月もぬ身の移やぬりよそよそは月

カクノ如クイサマカセ其古詩古歌古語古書古事古

ルコトアルヘカラス其古詩古歌等ヲツカフコト

これへは是は化語ノチカフナルヘシ

本哥ノ意及告白

いふてをとてまじりておのれのねりんものやけしき

おのれの枝のよ枝やるえんそひのやふ天うままをる

志しりあねのねりん志乃そ

侍人くまら居やるもる乃枝



名所ノ白 四品其一名則ヲツカウ白法

五月五日かきぬものや池田の橋 公翁

下京やるものやよらよらの月 凡兆

本母寺めくふ乃會ありまふの月 其角

如是名所ニイサカセツカハルコトナカレ名所ヲツカウ支

トシルニ喩ハ花ノ白ヲ葉スルニ吉昂初濃ヲカリ用或ハ

月ノ白ヲ葉スルニ姨捨石山ヲカリ用ルハ詮ナキ葉三方

ナリ五月ニカクシ又橋ヲ池田ニ定メ雪ノ上ニ夜ノ雨ヲ下

京ニ定メ江戸ノ哥ヨムヘキ則ヲ本母寺ニ定メタル

是例ノ能指ノチカフナルヘシ

其二名所ヲ思ヒ合スル支

口まらふ増乃庭そなんし記 翁

吟つらやまらむ白ひ乃捨もの 位水

つらやまらむ友人新れそむ 素牛

是等ハ思ヒ合セタル白ナリ其則ニ至ラスシテ名所ノ
白葉スルニハカチラス思ヒアハスヘシ祖翁オヨヒ古哲ノ
句々ヲ考ルルニ氏江ニ有テ浪花ノ句ヲ云出セルト云テ
ナシ 古人曰東海道ノ一スシモシラサル人宇治川童
住吉ノ汝テマサニ云出シタラニハ真サメヌヘシヨリノ
分別スヘシ

以春を近江乃人とし相 公翁

猿蓑集云望湖水情春トハシ書アリ或集ニ送別
トハシ書有一時ノ誤ノミニアラス後世ノ人ヲ惑ハス
二百衆三月ヲ引ハ罷輕カラスマ、こラサルヲシラ
サルトセハカリ我ニモイハシマシ

五月 公翁

之井寺の門たてあまやきの日の

竹宿をくくみとをまて

あまをいハ細代の氷葉を考つて 出さ

世時の白く幻位層のせうを思ふ

其二三名所ニ望テ句

葉のまのやふらふハ古き佛を 公翁

朝さくく吉地海 去来

むはく 舟泉

似今 丈草

将ニ其母ヲ得ヘシ吉野ニモ泊濃ニモマキル、葉ニ

カメハ詮ナキコトナリ

祖公翁曰名所ニソソミテ句ヲ言出サニ六其日其夜

ノコ、ロニマカスヘシトソ

又曰名所ニソソミテ其則ノ名ヲアラハサテ葉ニ句

句作殺多アリ名所ノ卷ニ出ス

公翁高野山ノ雛子ト真室角田川都鳥 素奈堂鎌

倉初松奠 園女ノ當ノ寺ノ更衣 ナト類ナリ

其曲名別ニ望古歌古語ヲ思合ス度

裸みちすし如月乃乃阿ししうね

公海

増加ノ聖ノ大悟ヲ思合サレし句ナリハニ書ニモ
西行ノ洞ヲシタヒ増加ノ信ヲ感ストアリ

從又きしむりゆり神の教

若ハシノ表ノキキリハタエヌヘシアルワヒニキカフキノ神
カウラキノ神ハ夜ノミ出テ益ハカクシ玉ヲヨシ

白川の関越るとして

卯の花をかたしし其園の曠着小

曾良

古人冠ヲ正スト有テ思ヒ合セシナルヘシ

和歌乃浦みち

ふゆの霧をぬきしり扇を次干持

鳥醉

和歌浦ニ以ミテクシハカタヲ浪共迎テサニテ因テ吟詠教

其五名所ニ望雅ノ句ノ事

かちぬくハ杖実悔後居るか

公海

光廣紀行

弟郎てかちより通る旅人ハ杖実乃里と我見候
是名所ノ新ノ歌あり

かちより軍ちよ忠しゆ山

支考

ヒツカニ云名所ノ雅ノ句云出サニハ春ハ白中ニ春ヲ云
ヘシ秋ハ白中ニ林ニ自然ト秋ナルヤウニスヘモ尤エノミテス
ルユトニハアラス古人モイトモシナリ



漢語ヲツカフ事

馬ルル傳て残夢月夜し菜の煙

翁

小夜ノ中山ノ吟ナリ

杜鵑啼や湖水のけし溜る

丈草

好ミテセヨト云ニハアヲ子ト残夢湖水ノ類皆漢語
ナリ故ニ正風ニハ落花燭半深夜ナトモツカウナリ
元日灌佛名月蠟八寒食 蝶菜
是等ノ題イッレモ漢語ナリ 蝶菜古ヨリ和
訓アレトモ和哥者流モテフキクト漢語ニテ
用ルナリ 依指モトヨリ用ユヘキナリ

名月や湖水よきかぬ七小町

翁

頃礼もくち交りけり改厚とつね

嵐雪

一句ノウチニフタツサ(ヨト咎ル人アラハ答フヘシ



和歌ノ詞ヲツカフ事 二前ノ奇題ノ部ニ入

火ヲモ水ニ云ナス夏

清輝カ真儀抄ニ俳諧ハ火ヲモ水ニ云ナストイヘルニヨリテ
火ヲ水トハカリ心ヘチカセノモノモアラニ源氏物語ニ松雪
ノミアタカゲニ降フメル山里ノコノチニテモノアハレナリ云々
此雪ノアタカケニト云是等ナルヘシ

蛇喰らふときゆはおそく 継子の巻

公翁

かかしのけしをめてふふ葉の花 支考

是等ハ火ヲモ水ニ云ナシタルオモキナルヘシ

咲カヘテサカリ久シキ朝カホラアタナル花ト誰カ云ケシ

是等ナリニテニルヘシ





侍ノ事

蝸牛ノ角ふるまひをよ須之の石 翁

昔アタリハヒハタルトイヘルモコノコトニヤト云ハアリ
堀牛ノ角ノ上ニ雲ト云國ト云國ト云國有テタカヒニ
争ヒヲナスコトサ壮子ニ見エタリコノ偶言ニヨリシ
モノナラフニ

ハのあつしきまをて跡 工 迪

雄略天皇ノ御在鳥ノソリテ見エサルヲ守サセ玉
フニ野守カ水ニウツリシトサタカニ申セシ侍ナルヘシ

卯の花やのりまの清和のか茂徳 其 角

卯ノ花ノ盛ナル頃ホヒヤコトナキ人ノ行カフヲ見テ清女
ノ郭公聞ニ加茂清ノカヘルサナル卯ノ花車ヲ思ヒ合
セシナルヘシ

軍書百物語スヘテ古代ノコトヲ思ヒ合スルナリ且云

人ノ名ナト白中ニムスフトモ正ニ對スルヤウニハセヌコ
トナリ

義仲のう麻骨見の山花秋也 翁

是火ウチ山ユテノ吟ナリ

祖翁ニ景清モ花見ノ座ニハ七兵衛ト云白有是ハ
延寶天和ノ頃ノ流行ニテ正風ニ用ヒス正風ハ貞季
ヨリ元禄ニ至ル貞季ナ元禄ノ吟ニハカツテ流行メキ
タル白ハナシ却テ延寶天和ノ吟ニハ正風ノ白モ又
多クアリ





ハニ書有テ白意ヲ深クスル事

はらへしをいふことばあはせぬがた
花よりほほゆるそのまはあつらひ

花あはゆるほほゆるそのまはあつらひ

翁

富中なる酒をいひて文君

此書も碎のまはゆるまはゆる

酒の酔ひ酔ひの香せよわさつら

惟然

借中一わのりしとて

ちるど紀の公あつらひとて花 越人

共来日盟栗ノ体トシテイヒオホセタリ 越人トナシ

テ程見一則アリ

梅スルニハニ書有テタミカナル比ノ体ナルヘシ比ハ物ヲ

トリテソレニヨレル 詞ニヨセテ去ト長 仄九七申サレ
シナリ

其罪ヲニクニテ其人ヲ悪クス

蚊ハ海をまじりしとてあつらひ 白雄

是等ハハツカナルハニ書ニテ意ヲニスノ趣ヲシルヘシ

又國の格めて郭公をやつらひ

あ國の格めてややゆとて

カクハニ書モ各句モ同ヒコトヲ述ルハ詮ナキコトナリ

サリヤトテ無用ノ文モ又書ヘカラス 證句ノ趣ヲ

味ニ知ルヘシ

宗祇は師ノふとんよふりて

名もまゝぬ小字花咲豊とて

名もまゝぬ小字花咲豊とて

ヲチカニテ目エタツモノハ此等裁ト毎ニタ

タルナリカレハコソアラカニメ 賢者有





名所三望テ詞書ノ事

崑崙とをくぐりて蓬萊方丈と仙の地と
まの何より士女地を指て蒼天をさし
日月のめんに雲門をひらくの世むふ
雲皆喜よのて美景千變と詩人も
白をはくは次方丈人も言をきと画こ
も筆を捨て去る若其顔姑射乃山の神
人有ては繪をくくし

雲を路の斬足時十景をおもへり

翁

山中ノ温泉ニテノ吟ナリ

白雲峰小亭を煙多谷を埋て山残

此家常し小ちさく西りあを伐取音
東み知文院し此後ノ敷るあはれ
あみ小寒を備石とふ白の思ひよせて

高取乃城のまはよとてし山 其角

よし山乃吟あり

救世大士をおもとたりて白桐を切りすを
かいつて實見ぬる東西をのきむ山おらし
乃風を午時の林れあふ白文樹色を
あつてつて傍房の書帳をおくは錫の
ふみし急房のやと降りし不もきをきふ
阿次か縁不深の地あるまはれ

新樹深く大観音は風とのめ 白旗

初瀬の吟あり

初瀬の吟あり細き許六風俗文藝等を熟読せし
書るべきのうちに宜く其て虚はあまぬ趣を
書るに文飾はよくきく虚より虚に
走る虚の次又俗中の俗言鄙言の交り
らねども其頭尾をて見く。即ちの
今其文を見ても多く、劇歌をりて
よ。其合をきくもて其よ出せ。文章
をよ。味あり。

○九日南都をいへり其心を

其心をいへり其心をいへり其心をいへり



西時ノ雨風月

よもみありをばぬ。そと、りぬ
世に小粒をあらぬ五月も
夕まや梅は白いむもま
ぬ。そは梅はあらし。其の
あまや。そのむも。其の
よもや。まの。その。其の
まも。その。その。其の
小系や。野も。その。其の
あ。その。其の。其の
風。その。其の。其の
清。その。其の。其の

翁 尚 白 及 肩 尚 白 其 角 木 導 嵐 雪 園 女 野 青 荷 兮 許 六

渡舟乃登了、引れ掩月
 馬のそておききりりるの月
 盆の月あつと門を打き入り
 見る人を物とけつ月のアツまふ
 名りや池をめぐりて重きまふ
 古根 懐雪 野坡 半残 翁
 一伴 丈草

カクマキし安キモノナカラ風姿風情ヲ本トシテ業ス
 ルトキハ春秋ニツシテモノニマキル、コトナシ

初心ノ人最ヲ得テ先ん最ノヲモキヲツヒテカ
 ニタツ子且古哲ノ澄句ヲモ向フヘシタトヘ心得タル
 題ニテモ同トキハ深キ心ヲモ向ヘルモノナリ心得
 サル最ハ勿論尋又ヘシ君子ハ下向ヲ一取スト巴ヨリ
 先達ノ人ニハモトヨリ若業ノ人又ハ下残ノモノニ
 モコトヲサルコトハイクヘニモ向フヘシコトニオヘテスユシモ
 一取ヘカラス一取テ向ハサルハ生涯ノ損トシルヘシ取
 得タル題ヲ深ク観念シテ趣向ヲモトムヘキナリ
 カク丁寧ヲツクシテ業スル時ハモノニマキル、コト
 有ヘカラス最ノヲモキヲヨク心得サル故ニ餘
 題ニマキル、コトヲモキナラシ
 妄名抄云俊恵ハ此頃モ只初心ノコロノ如クニテ業
 ハルナリトアリ有カタキコトナラスヤ是則丁寧
 及復スルノ意ヲ尊ヒテカク書ニアラハシヌ



物ニツキル、句

蝶飛しつゝあつめてくろく野中
けりしハ本推し踏し果古き

先ノ句塔塔ニモナルヘシ 次ノ句苔台ノ花ニモナルヘシ
是其母ヲ得ナルノ故ナリスヘテ句ヲ案スルニハ春秋
ニツレテ其次母ヲ得ルコトナリ

心しれぢ又思ひ出れりくく

翁

有人曰世白物ニ浴ル、白丸ヘシ 鳥醉谷曰源氏復磨ノ
巻ニ曰永クツシノ、ナルニ推シ若木ノサツラホノカニ
咲ソメテ空ノ氣色ウラカナルニヨロツノエトオホシ
出ラレテウチナキ玉フエトオホカリト云々
祖翁ノ句伊賀ノ上野故主ノ前ニテノ吟ナリ故ニ
若木老木ノ反轉モノニツキレマキレナルト論ニオヨハ
私曰其場其セツ其人ニ應ヒテ句味フヘトツ



當季カケ合セ未練ノ夏

陽光くや野ハもそ子のあはれ
ま柳やははまてぬるあはれ水の色

物ニツキル、ラクルニミテカク當季ヲカケ合セタル
ナレハミレニナリ自然當季ノ合タルハヨシ

時鳥啼や五尺乃あやんそ

翁

涼くや竹の子醜の香ひが

湖風

掃つるや塵く静ふ秋の人

伯先

是等未練ノサマニアラス

塙堀も出よ浮世の花よき

翁

一ノ吟や草吹那れ拈尾 甚

鳥明

是等ハ他ノ季ヲアハセタル句ナリ



題ノ文字ニスカル未練ノ事

同題ニヨラス文字ニスカル夏

子折らまて園を裁きり女帝意
窮形や海とくはきり根をたふ
カリ業スル時ハ何ヲ以テ骨折トスヘキ自然ノ槩ハ
一句ノ中ノ幸ナリハシメニ流白アリ

印まろししと難るを也しや女帝志

枯のゆゑ葉とわたりしや窮形花

是等ヲ澄トスヘシ

翁
万平

角樽や傾け香ふ牛ノ年

是ッ用ト云字ヨリ牛ノ字一カルナリ

花五水阿りて咲せよ天龍寺

花ニ水アケヨ天龍トカリタルナリ

夕雲雀まよひてあやめや鞠子山

落ルト云ヨリ鞠トカリタルナリ是等カッテ正風ニ用ルトナリ

分入連ハ川上きりしを採りて

人恋し大いしを採りて

わき手は空の初音を恨みぬ

夕暮れを門さす秋はあけり

柿きりや女敷の中も鳴りあけり

文字ニカハル時ハ風韻ナシ是等ノ白々味フヘシ

重厚
白雄
標良
嘯山
士朗

○

作ニスム夏 并ニ作ニナル夏

青柳や水より人の海をらむ
立竹の舟をこくまの民中

是等ハ其作ニノミツカレテ何ヲ原情ニスヘキヤ古人
曰作ニスムヘカラス一作ハ則一白ノチカラタルヘト一
作ノ白前ニアリ

ぬきこころの春の初や秋の終子 イセ 岸虎

ナシあやうい海もふ珠や月を宵

又キハナツ 声ノ鈕 月ヲ玉トシ 又酒スフトハ

是等ノ詞ニノミカ、リテ何ヲ以餘情トセンヤ

○

見立白ノ夏

曲水や心もこら組い清くくみ
狂言参りや心をも屏風よまゝ

見立白コトサテ嫌フ俗ニ落入ヘシ又何ヲ以テ餘情トセ

月舟栖をらしきまゝハす秋虫扇哉 宗鑑

藤の花ハかつきこの海士の帆曼ラれ 胡及

是等ノ白々趣向ハ見立ナシトモ

サシタラハヨキ 海士ノカウラ哉

ト云ルニテ見立ニテ見立ニアラス姿情風韻ソチ
ハシリ六義我ニイヘル真ノ作ナルヘシハ雲拂柳ニ真ハ
タトヘ哥ナリ或曰タトハ、風ノ体ハカクシ真ノ体ハ
アラハルナリ

○

何るの心も立あも知手ニロク月

公翁

月ニ扱ヲサシタラハウチハト見立テシ宗艦カ意ニヨ
リテカクハ申サレシナリ

コトハリナキ句

五月五日や中ましし降ふ十五日

世句歳日ニ云出セシニヤ日ハカラスヨク午尔葉ヲ考ヘシ
中ニシテフル列トアラハ十五日ニ言出シタル句ナリ中ニ
シテフリントアラハ晦ニ言出シタル句ナレシ

きんひより紀二日此月やさしり機

是二月二日ナラハ未タナルヘシ三月二日ナラハ初機六有
コシ或曰国三月ナト有年ニハ三月二日初サツラナルコト
モ有ヌヘシサレトモ是ハ希ナル故ニハシ書ナトナクテハ
アヒカルヘシ

約去年の本曾りや出る夜の月
さるりきりやもつき乃は小の笑
去来
之道

是等ノ句ヲヨク味ヒ證トシテ目ヲサシテ云句分別有シ

浮白ノ夏

檀木やうらのれの秋を立はす

冬川やせなあゆむる暑からむ

吟しテ知ルヘシ 立ツク寸 暮カハルトアラハ子細
ナシ及正白ノオサモリ所要ナリ切字ト云モ一白ヲオサメ
ニカタメナリ

白作二千尔於葉大切ノ事

并乃尔ノ人花ノ言 親諫ノ言

○死活ノ言

是月とみものい音じし今般の言

沖臥して城の志のろし核のりぬ

先吟丁夜終降タル雪ヲ乾ミタル句ナルハニ音ナシトシテハ
一句ノ三思ヲナサス是ホトノモノニ音ナカリシトアラハ子細
ナシ遇現未ノ三ツヲ句コトニ思フヘニ音ナシハ現在ナリ
三音ナカリシハ遇古ナリ

次ノ句袖肘セシマセマシヤ城ニナラサレハ城ノコノハシ
シマシ城ノサマヲヨク見テサツシ思ヒマリタルハヨシ
城の舞下居る核あり多るしあ 園指
をねちやぬ夜ももゑれぬぬる 藤白
如是ノイハハケルシカルマシ

去年見——花より花より知ん哉 人

是花ヲウル人ノ又カハラスニウリケルト句ナリ

去年見——花より花より知ん哉 花

是去年ノヒカニウリニ出シタル花ヲ又今年セウリニ出シタル

出入部乃ゆはつろ橋のゆき出り 誦句

出入部乃ゆはつろ橋のゆき出り 親白

出りハ神ナリ出ルハ用ナリ

昔年やあまの氣とて持てれく 死白ノ言

是ハアス咲花ノ子キレマウナレニトツ

人の田へ松子子のつて持てゆ—— 死白ナリ

是行クト定定ニテハ死神ノ虚ノ虚ナリ変化セスニテ

虚ニト、セルナリ 持て——あまもアラシカ

○ 一句ノ自他ノ事

東もすの川風をー 綱代也
影を見ても命婦の如く若菜摘
あゝ海も海人の花を世をうけ
たもてたうのかゆー 鹿乃川用

川凡何とに
若菜摘に
命婦ヲ見ルに
鹿乃川用

夜終川風ツラミハ自ナリ 綱代也トハ他ナリ

命婦ト若菜摘トハ別々ナリ

海人ノ花也ハ他ナリ 寒哉ハ自ナリ

右落テたハカユシト治定ハイカニ

志て望しり 縁の中あゝ 異哉

他門ニハカル白ヲモ 句トス 風雅ノ上ニハ人ヲ感セシムト
云セミナコレキル於葉ノ自他ノハカキナリヨク分別スヘシ

きりりす 統志をうけ 派乳哉

凡正風ノ俳諧集ニコノ白ヲ出セリシカモ宗近ナリヲモ
セシ人ノ白ナリ 是サノ自ノ白ナラ子細ナシ 男ノ白ナラ
他ヨリ見ナシタルノ外自ニウケタル作ナシ 添乳他
ニシテ統シヒルトハ自ナリ 一句ノ自他サハキニハサル
此ニテ人ノ師タルハオホツカナキナリ 人ノ師タルイマ
シメハ二十五條ニアリ

女子の花咲き 春も教をうけ
夕之ハのゆい房へ 降るはあけ

是ホハマキレマスキモノニシテ自ノ白ナリ



其人ニ應セサル白ノ事

綵線の家ノ白みゆれ夜寒引

カ、ル白ハ残ノ女ノ自ノ白ナリ

綵線乃音きく挽カ、夜寒引の白有へこ

の我ヤゆてくしてハ空ノ記碁ハぬ

風情ヲイハントテカ、ル白ハセヌトナリ残ノ女ノイヒ出
ミタラニハ尤ナラニ也

元朝ヤ神代乃るもおもひるこ
刀の只供も此色きく今朝の春

守武
正秀

西吟トモ此分ニ應スルトコロナリ

大船紙乃向く志月を草の如
鶯くくもく休め世をかくし

園女
智月

女乃弟ヲ思フヘシ

糸のせて上廊を出んいうのゆり
兜の脱ノ子立いとくぬ志くきか

^{抱女}多端
父露

抱女乃ちを思ふ

抱きくくくそら母もくねみさる

望一

亡月人ノ名ヲオモフヘシ

元日ヤ家み懐乃大ノ刀佩人
澄着てはゆれぬめくしお用子
秋風ヤ木々の弓不強ちら

共来



老武者し折やゆきし玉敷

是去未更ノ句ナリ其昔ヲ思フヘシ

心裏虫の音をゆりよまむと叶の庵 翁

雪もあやし梁もつむむ位に花のぬ

を心算すことるを折りしは花狂

陪者ノ常ヲオモフヘシ

ちる花を南岳阿弥陀佛と夕哉 守武

集ニ末期ノ句ト出セリ 其ノ用曰唯一ノ神職ニシ

テイカニニクミ玉フヘキ只嘆美シテ嗚呼トウキオ

トロキタル落花ナルヘシ

守武辞世

あーししも又ゆき末も神楽山

笑平のまじりのむかしし

了む

宗祇法師二十五禁ノ初ニモ

雑句の事 禁句の事

これ人みなをせざる句の事

ト有皆自他ノハカチナリ仮初ニ句ヲ言出スコト尤牌

カルヘシ且云自他ノコト人倫ノミナラス草木鳥獸ニ

對シテモ我コ、ロヲ入ル時ハ

ハスシヨ ハスシナ 咲ケ 子レ 撓メ

ミノレシ タモテ ヌケ 花ニミラルハ

ナトアルハ皆ツツシアルノ下知ノ言葉是等心ナルモノニ

去鬼ヲ入ルノ業シカタナリ

這い出たかひなぐ下乃 蟻の色 公羽

たやぐはけ九日もちりし 菊の花

是等ニテ知ルヘシ

○ 禁不白ノ事

炭乃火の人あきしんちよほり

世白意到不到白 人ナキ家ノ燈火ナリ炭ノ火氣
壁ニ赤クウツリタルモノナルヘケトモサハ字ハス炭ノ火ノ
壁ニウツルトノキキユル是禁不白ナリ

炭の火氣人あきしんちよほり
カリアラハ禁不白ノ難ヲノカシスヘテ公怒カニカハルコト
皆禁不白ナリ其餘ハオシテ知ルヘシ

吾等清一めきて 梅のまやりの花を

而美や身の〜〜〜ツクハ何〜あか えんげいの人 道第

ほ〜〜〜のよとれるとはひらめ

大ゆ〜やと口〜ち甲〜松流

松流
大案か

大ふ〜ハ祝言よらむとふと採りり

果〜〜〜年お孫の慈をそ服を穿るるをなこ〜よ

次、しんち
三つしんち

○ 祝儀ニ忌哥三首

送る字中かさ祝詞〜泣涙種乃一色鹿ノ毛を奪
塩干山至履の谷〜夕輝り秋たり 衣玉のた押
祝を〜ふは〜と〜衣履衣令下乃きゆる〜をき〜ん

祝言ニ忌哥二首

祝言み列袈退いぬる飽い〜ぬ〜り〜ぬ〜
隙のこぬ猿乃奪〜海〜鳴〜やもめ鳥不追出〜此種
新宅ニ焚火の鳴り泣きあすなき祝言の怪〜ぬ〜
夢相みハ祝言流人あきしんちよほり
追善具苦〜〜〜〜〜
元振小のむ〜山か〜月〜も〜
用捨ノ哥六首

乱世小火事罪科天災不順不孝不忠儀
近代の美人の法名官名を掛まきし知事かハクの上ま
四民とも今十三哲ノ人の名を出さぬあとの秘す我家の業
定るとまき思の句にまきを身よ腹心の此席退告の
神歌と分及の借換河ノ字に判書も占を際く厚き
連分めと堀川石まきと川能も二十年まのせし

去操哥四首

衣帯や竹田の毎日の月ね枕五句も去の巻
連分まき面まきと堀ノ物御然えハ七句去
砥物の文字ハヤコノてを堀ノ巻句や根ハ面堀之
追とても根まきそれも二句堀ノ下下陰も同隔え

ふふふふのふ二首

次三首

ふふふふおひきやとい志やん是と其のふみとは
めてあまハをいをもかんとみよのそハ七句のふふはこり

杯小

兼のふふふふを扱ふ

老人器白

別風庵丘高ノ句兼のふふふ扱ふト云テ見テ
ノ句作ナリ是實見政ノ吟ナリコ句出来テ年々は合悪ニ成
自身ヲ西度ニオヨヒ戸妻西人果自化中風登ニ終モ至其
身天改九将月止日卒大醉同十年死ヌ嫁孫アリ當時以絶可憐可慎

不承

相のありし彰亭の塚々々々々

雲々々々彰亭の山科のいさよの奥乃秋の夕首

ありしと小石流り谷川をかどくつありしとの産人

足利義政公南郡清和院に可承あり

石山と自の山科

神下り地をさし一應を唱那れ

は言を野のちかのふ白



寂琴曰初心ノ門人ノ白ヲ見テ思フマニ善悪ヲ解時ハ
赤面ニテ後口ヲ閉テ却テ諫ニ

同士の雅吟ヲ難スレハ終ニ呉越ノ媒トナル

是ヲハカレハ門弟子詞友ニ面従スルノ外更ニ

術有ヘカラス 如是ノ時ハ師弟氏ニ道ヲ失フ

故ニ師ハ諍ルヘカラス弟子ハ臆スマコ

若師友ノ判ヲキラフ時ハ獨学因陋ナリヨク心得

ヘテ親友ノ情ヲ込テマシハルヘシ

或曰我ヲ知ルトキハ其人ヲ教シヘスヲミラサルトキハ

其人ト遊フトイヘリ

少年ノ人産業業ノヒマ有トキハ俳諧ヲナスヘシ俳諧ヲ

ナセハ多ク鳥獸草木ノ名ヲオホフ且年中ノ行古支古

哥古夏ノ意ヲモ傳ヘ知ルナリ又ヘテ物ノアハシナル
コトヲモサトリ月花ニ對シテ面白キト云心モ先
ナリ又老若隔ナク談話ノ即トモナル故ニ能諧
ハスヘシ俳諧師ニ成ヘカラス是産ヲ破ルヲ憎メ
ハナリ

或書^三叔句ハ耳ヲ以テ聞ヘカラス眼ヲ以テ見ルヘシ耳ハ物ヲ
隔テテ故ニ表情ヲハユヒテ推スル故其理カサ理カト
思ヒスユシテ春ハ明ニオモヒトモ人ノ耳ハト、カヌナリ
目ハモトヨリ我モ人モ見シハ花ト鼻トモ取チカヒス
句作ハ其物モノ、取ハマシニヨリテ面白クモ古ク
モ上キトモ下キトモナルモノナリ
口ニ云ハマスク意ニ知ルハカタシタマノ、意ニ知ルト云トモ
少シノ取ハマシニテ已カ意ノ面ハミハ人ノ耳ハト、カヌ
彼モ面白カラス我モ面白カラスシテ自暴自棄ノ人ト
ナルノミ

又
我心ノ水カ人ノ心ノ川ニナカレテコソ面白ニモ善惡トモ道
理ノハカルモノナリ

又曰句作ノ上身口意ノ病ト云アリ身口意ノ病トハ
雅言ノヌメリ 俗語ノイマミ 言語ノマヒ 是ナリ
而晴々色をさす所のすゝきと 泉

是ヌメリ句ナリ「スホト云ニ暗色アルナリ又色ヲマスホトハ正
風ニアツカハ又雨ナリ」尤一句榮幸ト云コト前ノ条ニアリ
見て「清々」人の引をみ花ちりて

是言語ノ上病ナリ上ニ語ルト有テ又言葉、重ルナリ
おひの氷おちのりやもりけしゆ
ふりやまきり傘のあしき時
去田せめし山吹のやせとやけ
山神の小使清く一源の春
世のよらぬはなもあはれぬあはれ
是等ノ白ハ塔コト云義ハニイマミ有

むたき
口笛
清川
吾お海
ゆき

○ 発句ニ真行草ノ作者事

象馬其雨や酒施合歡の系 公翁

是真ノ句作ナリ真ハ平外ノ詞ヲイハス喻ハ麻上下
ヲ着テ人ニ對スルヤウニ行義ニシタル発句ナリ
天道有地道有其中ヲ行ハ人道ナリ天ハ真ナリ實
ナリウツラスカハラヌナリ

△ 心法、らも雪見み終ふ唐可也

是行ノ作ナリ行ハ同少事懐マシトモ心ニ真有ヲ云
雪見ニユロフ一則マテト詞ハ平懐ナレハナリ雪ニ切ナル
心ノホトヲ見ルヘミ一白袴着テ人ニ對スルカ如シ
是地ニシテ滅スルノ期ナカラニ

振るる其尾ありきなり夷隆

是草律ノ格ナリ振ウリトアレタル詞ヲイヘハヒス隆
ト俗ナルコトヲ云タル一句上下ニアラス袴ニアラス羽織
着テ淨留理指ルカコトシコレ哥最ニアラス能諧題
ナリコレヲ横モノトモ云草ハ人ナリ天地トモニウキ
働テ時ノ變化ニアソフヲ云

△ 不易流行ノ句先ニモ出タレ且又其句上ル

まき柳其泥み志きまき 汐日あり

此の句乃總皮の若くは意あり其の形もあまらぬ
凡そよくあまらぬ川の夕暮は清寂を夏の志にせり 西行

景曲ユノニ首ノ中へ入テモサノミオトラニ句作ノ細ニ又
鬼魁ノ入掾趣向ノトリマハミ味へ知ルヘシ 家隆

月まらやむし〜みちりき 須よの浦 貞徳

秋多のつとあつて門掃く男の如
身を捨ぬの如く虫の如く高き
世西人の家門ヨリ地流ト唱し凡カク不易ノ吟セアリ
流行ノ白

風あまに青い海舟抑う由 其角
年々やほつとあつていふ初時
浩海ふ日を鳴くくく地ゆの如 乙由
不易ニ偏ナルモノハ流行ヲ嫌フ流行ニ偏ナルモノハ
不易ニ嫌ヒアリ是イハユル共快ノ吹風舟帆ノ逆風
ナリ是等ハ不易ノ流行ヲ嫌テノ白作ナリ



○ 虚實ノ白ノ夏 虚実ノ論ハ蘇白ノ巻ニユツル

夜夜水鏡に起る海ノ如 実く
振つて出まきも水鏡や海ノ如 虚く

ぬきこむお守色乃細や夜の雅子

麦林曰ヌキハナスノ辞多用ナリ能器ハウソニテウソ
ニアソフスナルモノト知ルヘシ色ノ二初ト云ハ嘘ナリソレ
ニ又ヌキハナスト嘘ヲ童子ハ嘘ノ実ニ落入ヘシ
能器大虚歎ナルヲ人情ノアツカヒヲ入テ虚ヲ実
ニキル義ヲ以テウキナラフニ雪ヲセ炭ト云ナシ心ナキ
鬼神ヲモ位シムコノ塚ヲヨク分別スヘシ
又曰虚ニ落入トキハ鬼ナシ鬼ナケレハ御夏ナシ御サレハ
死白ナリ則死活ト云セ是ナリ

寛延ノ末坊ヨリ宝曆ノ初ニテ浪波ニテ俳諧中
絶ノミキリ能列ノ寸馬ト云人浪波ノ馬明ニ道
ヲ傳ヘル其後ニ柳竹阿ナト追々ニ出ル是ニトニ
眞實貝ノ好人ナリ

羨しい色も有り少く 猫の意 寸馬

粥抄やなすつゆ人オトシ 羅門

ふゆふゆぬ帷子着きも白き 柏舟

ふ梅や吹きくはる 且んぐり 石瀨

夕歌とすまふ母のすくく尺骨 疾 呼見

天和貞享ニ且林元録ノ正風宝永ニ其角カ洒落正徳
不角カ化調享保ニ若州カ比喩長水ノ五色墨乙由カ伊
勢風元文ニ決々カ浪花ブリナト、流行スレト俳諧ハ人
ノ枕詞ニアラスシテ天下ノ俳諧ナリキ



歳旦ニツ物仕様ノ夏 并表ノ仕様ノ夏

同歳旦ノ白ノ事

かりぬとこ千本の今朝の春 大江丸

空庭を渡る 西方山乃空 完来

紅毛の船乃高どのきらめき 不二

正月白ハ元ヨリ振ハ元日ニ日ノ内ノ趣向ヲ以テ附ヘシ三
日ハ早面白カラス弟ニハ二月ノ季ニテ趣向ヲ立ヘシ
元正ニニワタルモノ然ルヘミイツレカルキ季ノ物ニテス

柳乃凡し梅おゆふし字 振

教の子乃水曜にぬきみき 廿七

是振ニ初春ノ詞ナシ教の子ハ初春之水スルハ三月ニ
ニツトリ合ニテ前白ノ引立ニナルナリ

冬の日奇仙表

いづれんとして 雞面牛をいづれ

相笠

ついでとあつたれ 桑乃 玉

荷兮

くち州下をみ 雲をいづれ

重五

捨つたにまをやり 毛あさる

杜國

浪子捨つらん 月ハミ

芭蕉

ゆきりゆき 移をまうれ 波阜山

野水

一書ニ浪ノ白并六旬目ノ輝大塔宮ナトノ漂泊ト見カヘテ

銀ニ蛤貫ハトナラム次ハ燒蛤ノ葉名ト定テ左ニ橋ヲ

スカシ右ニ波阜山ヲ見ル眼前ナリ

一書ニ表ハカリノトキハ名所地名ヲ出スコト是等ヲ

蕉門ノ手本ナルベシ

歳旦ノ発句ノ證

月の秋花乃春まじり 且つれ

宗祇

元朝や神代のるもあひり

守武

芳世葉ふ雪もや伴幣の初候り

翁

元日み因ふと此日あはれあひり

々

正月三日ヲ函題西日

大津路の雪のけしきや何佛

々

歳甫ニ句ヲ作ラムニオエテハ分テ其心得ナクテハ

有ヘカラス前吟皆陰陽和合ノ頌ニシテ君カ八千代

ノサカヘヲコトフキ兼テ自他ノ此ヲ祝ニ風雅命

論白外ニ溢ルヲマ是等ハ兼且ノ詠格ナリ

元日や 元朝や ナトイヘルコトニ大古又ナリ古ニ

ヨリ元日やト云テ元日ニアラサル句多ク守武ノ元朝

ノ冠置得テ妙ナリコノ白朝ノ字ニ深キ故アリ是

神道ノ秘スル則ナレハ暫モテシヌ

祖翁ノ茲逢某ノ句ハモトニ茲鎮和尙ノ哥ニ

コノ春ハイセニル人ヲトツレテタヨリウレシキ花柑子カナト

云レニモトツキテ柑子ハ年ノ始ノカサリモノナルヨリ其

縁ニヒカレテ茲逢某トハオモヒヨテシナラム全歳且

ニウコカサル則ヲ知ルヘシ 夫伊勢ハ神都ニシテ戸

氏ノトホツミオヤノイマス所ナリハ父茲逢某ハ仙家

ニシテ不老不死ノサカヒナリ是昂神佛ノ如シテ

家ヲ累且ノ祝詞ナルヲヤ

元日ノ田コトノ句ハ日ノ字ニ用有テ月ヲ互照スヘ

キカタメナリトソ

大津画ノフテノハシメハ後代某且ノ拾式ニセヨト

云心有テタルトタモカニ安定ニハヘリ又引附帖ノ内

ニ七種 子曰 元日 二日 三日 ナト云 題ヲ出シテ

句アリ是大ナル保ナリ師説ナキ故ナリ子細ハ元日

ハ明ケタル時ノコト、有ニテ知ルヘシ依テ元日ノ登句

早天ヲ寂トスコノ句スニ前書有ヲ以テ分別ス

元日ノ水乃音

来山

世白モト鬼丹貝カ句ナルヨシ丹貝コノ句ニ未安ノ可有

トテ捨オケルヲ来山名誘テ相立春ノ某且トセニ諸

人称セシトナリ 許六日コノ句上文字春立ニテモアラ

カ元日ノ句ハ紛ニタカヒヌラムコトナシ西果集ニ

少シクもや 家中の礼を星月夜 其 角

世白初元日ヤト置後百練ノ後春立ヤト有ニテ祖翁

評ニテ春立ヤニテハ未衛ノ七五ノ云トリニイサカ叶

ハヤラニカ年立ヤトニテ子細有ニシト加筆申サレシ

トナシ

年々や猿は若きも猿の而 公翁

世白全仕損シノ句ナリフト某且ヲ猿ノ面ヨカルト

思フ心ヒトフニテトリ合セタルナリ則仕損シノ句ナリ

トソ



登白平白ノ趣向ノ事

甘菜の花ハ絆屋の道を他リ居テ

ヤコ

正秀乃弟三ニ作りシヲ業スルニ登白ノ道具平白ノ
道具弟三ノ道具ヲ發明スヘシ

喩ハ絆屋ノ窓ニ甘菜ノ花 夕時雨 初雪

陽冬 燭牛 五月雨

コノ類皆ヨシカマウニ一風ツ、味ヲ以テウエク物ハ
平白ノ道具ナリ

瓜ノ尻ニヨコシタルハオカシトテ有言仙ノ六句目ニ

とらとらとらとらとら瓜の細の目 許六

ト云句セシ其次ノ年翁ノ白ニ

朝の露とらとらとらとら瓜の尻 公ね

是ニテ登白ノ道具ナルヲ考フヘシ



重言葉ノ発句ノ事 元切ノ格

清少納言

桜咲梅の園のゆく花咲さう阿婆さちの梅あゆみ

コノサリラ一々ハタラキ有テ者知ルヘシ

山吹や花子葉あよ葉あそ花子葉あそ

三日月乃名もあき山をこぼ立山

世はくやわたりくゆるりりき

セツ切
中巻のや
ツツ

君やホー系やりあんおまわり次ゆめうらみの片てか定てう

おやそまむやそまきしけそきのり今の月よりあやまを

因習やねろあやましふ夕アうねと 雨を

よのやハ舞のやましふふをほはらうめ田子

風やあむちもあそつんそめ一そあ介 宗 祇

やと寝シルト強いて乱とあそく

何そらつとあそくおひ乃 葉うふ 忠 知

用弁のあね



風雅ニ天地自然ノ感有支并風諫ノ句

雨乞ノ哥ニ首

小野小所

ホトリヤ日ノもあつハ思もせ免れりとも又下
天の川苗代水よせきくせあ戸くくりきん羽あか神格園信

コノ哥ハ皇別分枕ノセツ大ニカニハツニテ民ノ欲キ一方ナラズ
能因其欲キヲアハシニ首ノ哥ヲ詠セシニ雨下リテ民ノ欲
ヲ止メシメ其ムクヒトシテ百姓等降ヲ極テ能因ラナグサ
ム能因其志ヲヨロコビテ是哥可賃ナリトテ賞セシト
ナリ仍テ餅ヲ哥賃ト云トソ又曰伴饒ノ三嶋ト有是
カチニセツ其以前コレナキコトニヤ追考 實はコレニ

雨乞乃句

穴ノくまのや 雨乞乃句

大水の人の

小野信作

おのくまのや 雨乞乃句

不角

瓜ヲアラス狐有ッ角コノ句ヲアマタヒシニ此ニ書シテ烟ニ
建ル夫ヨリ其難ヲサケシトソ一句ノ中ニ禁示詞アレハ
カナラス其此ニ害ヲウク天地自然ノ理豈ナカクマ
龍産の祈乃句

摩何被君は 雨乞乃句

宗祇
宗長

一二もまして 雨乞乃句
おのくまのや 雨乞乃句
桃隣

煙々々々 雨乞乃句
不角

是次男ナルモノ他家相續ヲセシニ尔セシ句ナリトソ
不角ハ不トノ門子ナリ也男に辰角ト云アリ
元祿中法橋ニ進ミ享保ニ法眼ニ昇ル
角一狐ヲナス 是ヲ化鳥ト云

○ 白作ノ論

祖翁曰一世ノウキニ秀逸ノ句三五句アラムハ俳者ナリ
十句ニオヨハシ人ハ名人ナリト云々

或人曰公翁ノ白ヲ譏ル者有我是ヲ争ハントス翁曰カナ
ラス争フコトナカレ余ヲノツカラワカ句ヲ以テイマタ
ツツサスト思フモノ多ク却テ五三ノ白ヲ揚テソシ
ラムナ余名人ニ似タリト大笑ヒヲモヨホシ玉フ

或書曰白法ハ勤トウコカヌヲ汰シ唯母ラカニスヘシ
コノ故ニ某シテ得スニハ早ク止ムヘシ若ト與ツキナハ悪
シク氏能聞ヘル所ヲスヘシヨキ句ニ似タラニアマシキ
句ハ風雅ノ罪人ト云ヘシ又曰句ハ己カ好ム所ヲ以テ
評スヘカラス唯句中ノ内月折ヲ見出シテ熟不熟
ヲ極ムヘシ

發士ノ道セト久リ少シ花盛 北 技

コノ白カハ士ハト云ハ文字不熟ナリ故ハノ字ニ自ノ
用ノ免ノユモルユヘナリニノ字ニテ子細ナルヘシ

明月の雪不負一し 公翁

公翁ノ白ニテ名月乃ト名ノ字ニテ一哥仙有
名月ハ八月十五夜ニ限り明月ハ四季ニ通ス故ニ
明ノ字カ、又法ト雪ヘハヘリヌ

新しき名ハ名もあつらん 梅

板行後イタキハ余オナリケ様ノ白作ニテ他門ノ
白ナト嘲ルコトハハツヘキノ一ナリ 名モナルラニ
トハ甚相遠ナリ是ハ世ニ説經キルオト云ナリ
名モナルヘシト云コトナラニ
是上下万民オシナヘテカニセヌモノコソナカリケリ
ト云ニヒトシ

秋きぬく 栞校刈草くすあかり

ユノ白、秋キヌト云五文字ニテハ下ノ箇リヲ示ス
アリ、箇ラス 栞校カルカヤヲゾウリニケルト云
ヲゾノ 置タラニハ上ノ秋来ぬ相續スヘシ

秋来ぬく 目みいさやみんし初くも風のきりきり
ユノ哥ニテ知ルヘシ 六百番哥合ニ後家々

秋きぬく 風のりきいんゆきもあを原さハ音せりり

秋来ぬく 云ハ下ニ示ス示フマハラスルタメニオケ
五文字ナリ 音ニケリト云箇リハ下ヘツカス
五文字へ戻ル心ナリテハ秋キヌトハ置へカラス

稿つ月のかきやせし 写あうね 去来

マニ夜ノコト年ニタケハル月夜月ノ夜トハ云フ
コハハレト 写夜トハ都鄙ノ詞ニモキカヌコトハナリ
写ニ夜ノ字入トキハ示ス示フナリテハイハス受来

行々もいもむ 美の戸や冬の月 風 國

美ノ戸トハツナシス美ヲナリ 是言美ヲ又故
ニキル美ヲ入テ連続サセタルトヘタリ

初雪也 くらま 其 角

一句ヨリ連続シタル故 切字ニツ入テモサノミ耳
立スサレト上ノヤヲニニテ子細ナキ白ナリ

命好ら。申よ 活きく けり 翁

此句古々ノ人ニ久々ニテ途中ニ回り逢玉ヒル時ノ吟也
上ノ字アメリナリコト許六 芭蕉庵ニテ借用ノ義
ニ命トナリト乃ノ字入テ有ノ、字入テ見ルトキ
ハ誠ニ夜ノ明タルカ如シ

寝もろや 別て 幾日そ のと 風 惟 然

コノ句大切ナル切字重テ夢句ツヘキナリツハハニ
テ子細ナシ

大まゝあゝ家内々乃々ア哉

許六

暮秋ト題号シテコノ白巻既ニ入タリコノ白暮秋ノ句ニアラス古来秋ノ暮ハ暮秋ニアラスト定シリ只秋ノ夕暮ト云コトナリ則曠野集ニモ中秋ノ部ニ入タリ春ノ暮ト對シテ秋ノ夕暮ト暮秋ト心得タル人ホ有秋ノ夕暮トハシヨリナラハ也尤秋ノ暮ト云白ニ暮春秋ヲ兼タル句モ有吊カ許六白ニ延ておとろふ弟もや秋のくれ

是暮春秋ヲ兼テ九月ノ中ニ入タリ種ノ暮ハニナ八月ニ入ナリ 又柳蟬乃卷ニ

黄鳥乃啼や 古も引の原

大ッ 玄香

コノ句學ノ啼ヤト切テ又古モト云珍シキツキナリ 學ノ啼乃古も引の原ト云句ナルヘシ

右ハ五老井許六ノ句評ナリ

下草や 雪つむくの夜のも

凡兆

翁コノ句ノ情ヲ貫シテ下京ヤノ五文字冠メ玉ヲ鏡もや 比良より 水を寄けし 李由

夕ウ舟ヨキ合ナラント公翁ノカムラシメ玉ヲ

冥を祓ふ 冥怪所乃柳の森 朱迪

蝶のまや 蝶ニ以女女の目より 淀村

四のそよみ 遊ソレソレ 冨士詣 突奥

葉スルニ冥冥汝村カ句ニオノワカラフ句中ニ血脈ノ脈有故ニ上五文字下五言 置ヤスソシテ白ニ交ヨカラニ朱迪カ句ハ白ハ血脈ノ脈ナキユヘニ上五言ナソテ白モ又ヨロシカラス

ちの時の心や 花子の花 越人

一年晋子カ江戸ニテ白兄弟ヲ編ルトキ 御六語テ曰

哉人カ女子ノ白ハ少シ云々ラスメシカニ女子ニハ取カ
シ其句ヲカヘシテ 教子叶々凡也たのちん女子の花
トセシヨシ沿リケルニ吊カ曰サレハコノ女子ノ白ニテ翁
名人ナルヲ発明スト云ハ晋子カ曰イカ、答曰コノ白
女子ニテハ少シ云々ラス故ニ 僧ニワカルト云前
書シテ錢別ト白ニテ憶ミノニ入玉フト語リケ
レハ晋子ウレシカリテコノ夏書入ヘシトテ亦去ノ
コトヲカケリ哉人カ女子ノ白ハ師ノ前セニテ遣ニ
光リヲ憎タリ路通カ月ノ山ノ白合ニハ夕、女子
ノ白ニシテ前セナシ予コノ時路通カ未練ヲシ
リ其ッ用ハ女子ニナラサル夏ヲ知リテ白ヲ去シ翁
ハ弟去ヲ添ヘ玉フ可砂仗シツヘシ

一夜乃医者くまのこや帰花

許六

師ノ迂化ノ時追悼ニ唯カルミヲ珍ニシテノ作也

然ルヲ晋子ハ医者物回ハムト加筆セシナリ晋子ハ
ウ如ノ格守モノ曰ハムノチカラト見ヘタリ 吊カ白医
者ノ殺ト云ハ通俗ノ詞ナリ枝ナル顔ヲ見スルトモ
云リ師ノ追善ニヨロヒナト云ル夏ハ不處有ヘキ
古又ナレト 述徳ノ哥ニトノ白
切セぬもくきー 志まかみホト云ルヲ
後鳥羽ノ院ユトニ御感有シトナリ
弟二年ノ追善深川ノ庵ニテ吊ニ翁ノ像ヲ画セ
タル故ニ其前セラシテ

秋實のやねはまの時の乃あやうね

許六

云言ノトキト云ハ西行ノ夏ナリ又弟三年ニ

月雪のあけしーうきー残子介

々

是考根ニテ我徒ト追善ノ管ノ白ナリ

あまの人の裾をつらめを納ま

嵐雪

師ノ追善ニカマウノタワケナルコトヲ吐テ可慎

あつしり地もふるさぬきききか 去来
あつしりふこりれ月乃吹ちりり ね 荷ガ

去来お曰二日ノ月ト云吹キルト働タルアタリハルカニス
ソシタリ祖翁白荷ガカ白ハ二日ノ月ト云七ノニテ
作セリ其名目ヲソケハサセルコトナシトソ

様もいりりもの色打碎け 松風
髪拂や何を切らも押らぬらん 文考

先白ハ情よまふみぬハ情よまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふまふまふまふ

白合

一番

尤持

落葉

落つぬ木の葉あみあみおれおれ

風水

右

落葉ふとてさるたつきに塔一ツ

松満

たの白景色微細ニ心ヲ付タリ右又山もアラハナル不ニ
詠一句ノタケモユマカニワへ佐ルサレトモ白中目ニ見え
ル切字ナク五文字ニテ言残シタレハ切字ヲ加へテ見
へキニヤ程分明ナラサルヲ難シテ持ニ定メ佐ルへキ歟

二番

尤勝

霜

親と子供あそぶあそぶあそぶあそぶ

溪石

右

霜ふりし海をかしらぬ水の舟 勇 拓

七ノイハヌ四方ノ敵キスヲ^ハ家ナルカナヤ牧子思フハト詠
玉ヒコ古哥ニ使シテ野馬ノ子ヲイトフサセツナリ

右ノ白モサモ有ヘキナカラ左ノ白秀リ逸ナレハ負佐ラ逆

三番 左持 夜真引

春坐立し月東ニツラし東真不 工 奈

右

山に狸得失とて大も形 文 鱗

左ノ白茂と深分入タル狩人ノ形容イフカシキ則アリ

右ノ白モ姿ツヨク詞モユニ^ニ覺え佐シトモ其得失家モ分
カタシ仍テ以テ持トス

曲番 左勝 拈野

松苗も枯れし目もくらしぬ水 枳 風

右

大橋を枯れし海も入日さぬ 全 岸

左ノ白木枯ノ吹を^ニテ苗松ノソヨノトウユキタル風ノ

マトリ目ニタツヘキモノナリ寸松虹梁ノ次女ヲフクミテ

一句タケ高し右モ又枯れノ風景見捨カタク佐シトモ
苗松ノカタマ目ニ立ハヘラン

五番 左持 綱代

子をつまむる水の綱代小サ裏披し 心 水

右

綱代本のゆきとやまぬる水さぬ 不 角

綱代ノ床ニ子ヲ連ルル他意メツラカニシテマサニ右

又綱代ノ板ノ氷ニトキテ寒イマミタル氣色尤右感
分カタシ

六番 左衛 石落

破きまの流りぬ散出の袖うね 調柳

右

石落喉のや流り引捨し雪車のは 立込

尤ノ白袖トカ云モノ、家方ヲ見オユセタルト云ケムヲク
薄モ思ヒヨセラシテヲカシク使ルニ引捨し雪車ノ白
意シカト聞エス仍以テ左衛トストナリ

七番 左衛 鴨

鈴鴨の音あり流り白尾 嵐雪

右

鴨くりにて草を子枯も塩屋哉 真児

鈴鴨の音あり流り白尾ノ限リナシニ白マスヲカニシテ
散きノケシキモタリ彼妹ガリノ哥ヲ吟ズル六月
廿四日七寒ノト云ケムサルコトニヤ石ノ白モ蚕ヲ飼フ者ノ
キヌキヌタメシモアハシニ使シトモ鈴鴨ノ鈴ノ音ノ言ハ
高シトマイハム

八番 左 氷柱

風舟まて氷柱おらけ 楓うね 一 排

右衛

門留て果居を 氷柱哉 琴風
氷柱ニサカル楓ホノカナルケシキ細クカラヒテ哀ナルニ右
ナヲ煙々へノニシテ葎ノ後ハ氷柱ニ門ヲ曳タル果

居ノ底或ハ情ニワリタル様ニオホエ俵ル

九番 左持 霰

曉乃阿らきと色のはこころのね 孝下

右

炎深くゆきふりし可也を敷哉 伸風

烈風寒を威嚇ノ痛足之ヲ滅ト云ルニカクテハヨニモア

ラシフルカナト吟聲ヲ淋シキニ右ハ又地馬ノ霰ニ響キ

タルサマヨクモ言叶ヘリキノ明見ルトヨ師曠カ耳ヲ

ソハタテ難婁カ目ノサマヲハワスト云は左右ノ是也

弁スルコトアタハシ 十番 左勝 神樂

此神楽や火を燐湯すみりやうら 六来

右

独押すゝるそ物少神楽 孤屋

左ノ句サセル難モナク秀タル所見エス右ハ独押神楽

ニ可変コトイカ、右ニ難有ラズテ左ノ方勝タルヘシ

十一番 左 既中 京 観水

山里や既中とくさ人もし 右

既中着ぬ出家見らるし地中 簾言

目ヲシヌ山中ノ客カソ、口ニ巻セラル、楓林モアル歎

右ハ目ニ立テ程スゴキ冬地ノ法師人ニハイカ、思ハ

心ハエモ有ナム仍左マサルヘシ 十二番 左 煤拂

い川さし舟りて遊りむ様拂

翠白

右衛

煤すすしりて寺てらをめてたき佛ぶつ哉 不ト

煤拂ノ日ノ遊ヒ則ニ僊せんタルモ優ニシテ艶ナリ右ハ
寺ノ煤拂ト思ヒヨリタル先珍ちん室ニマ両白はく清せい松しょう音ノ
コトヲ失ハス感心ワキカタク依レトモ目出度佛
哉ト云い句ノ勢いきほヒナラマサリテ聞ヘ依レハ為勝

一柳やなぎ軒不トノ主ハ此ヲこゝろ茶ちや境がいきニ臨ヒセマリテ心サシ
ハ雲くも井い山ノ岩根ヲタトリアルハ吉きち野ノ花ニ笑わらヲ
恐おそヒ湖水ノ月ニつき懸か出でヲワカヘテ風雅ノ奴トナルユ
ト年アリ是ヨリ先モま集あつ成じやうスコトフタヒニ及フト
云トモ春秋をク雲行雨ホトコシテあ東とう籬しノ菊

ノ名ヲサマノ、ニ唐朝ノ牡丹モ花はな實じつヲう天てんニス
梅ノ僊せん様ノ真まニ折をりニラレ時ニタカハハ白モ又人
ヲ發はつシムはつ其そのシケキ林ニ入テ花ノ香ノ清キニ
ツキ色ユキ木ノ葉ヲ拾ヒテた石いしニワカテ積た
テ四節トナス判士四人ニ与テあ系けいモ其その一ひとニ
タカフ諫かんア樂がくニ且かつラル、セノ、公こう田でんヲヌスムニ似にッ
レトモトイハムサレトモ青あお鷗うノ目ヲヌヒアフムノ
口ヲ戸かどガ、ムエトアタハス負お享じやう卯うノトニ筆
ヲ江上ノ水ニツ、キテツヒニあ蕉せう菴あんノ雪ゆき夜よノ
燈あかりニ對ス

松しょう書しよ々さ

墨引点印洛貞室、式年 祖翁秘印

し一点初心 七二点 七 七 徳ニ珍重アルハ三三三及

二字印啼鶴 三字印岳楚月 四字印美北窓樓雪

五字印長安夕鐘萃 四字ハ八印く 五字ハ十印く

舟登成帆土成風能芭蕉哉 蕉翁十五印ナリ

芭蕉翁引墨奥印之寫

し 七 糸九ナリ 七

芭蕉翁秘印 字白 字玉

式書ニ東野芭蕉 又 大々釣月 七

歌仙ヲ解辨

花馬上欄干

新月色

迴雪

附録花押ハ名ヲ草唇ニ書タル花押ノ上ニハ性ヲカクコトナリ 今世アヤマリテ名無キヲカクナリ庭訓ナトミルヘシト云云

侍題 行題 落題 夏

侍題トハ梅ノ題ニマナキ鶯ナトヲ入ルナリ マ、モスレハ梅ハ外

モノニナリ 柳等ニナカラ入モノナリ 題七分 マシラヒノモノ

ニ三分ニ作ルヘシ尤體用ヲヨク心得ヘシ

行題ハ 一首ノ中ニ物ニツアルヲ一方ハホメ一方ハソシルノ

類ヲ云ナリ

落題トハ 兎角一首ヲ面白云出サントテ えモシラヌコトヲタチ

入テ言葉タクミノミニシテ 其題ハカスカニナルヲ云 タトヘハ庭

ノ氣ヲ云ハントテ庭ノコトヲ專ニ云テ氣ノ姿情ナキカトシ

是ヲ俳家ニテ雜ト云 是等ノ分別アルヘシ能アルコトナリ

冠着ス 袴キズ 沓ハカズト云々

冠者ストハ上五文字中ノ七文字へ用ナツカヨハヌコナリ

あゝあゝのしんきぬ神と眼とを

襷着ストハ上五文字下ノ五文字ニ因テ中ノ七文字用ニ
タヌコトナリ 赤石とをしんきぬ神と眼とを

沓ハカストハ五文字七文字ハ連続シタレトモ下ノ五文字用
ニタヌコトナリ 赤石とをしんきぬ神と眼とを

○ 右文無文ト云々

右文作トハ意ニアヤアリテホソクカラヒテ 元ニニノトメキテ
アハレモツカクイハヌコノ白ヒコモレル向ナルヘシ 向作云
ツメスシテ 手ノ葉ニ云ノコシ人ニサトレトイハヌハカリヲ
秀逸トスルナリ

無文作ト云コトハアヤナキコトナリ 向作思ヒヨリタル趣向
ノコラス云ツクシ コモリタル手ノ葉モナリ 味ハフヘキ所モナシ
手ノ葉ノオモムキ一札ニノベ判形シタルマウニテ 可ラニ情
ノナキモノアリ是ヲ無文作ト云ナリ

大威徳あまのこけのニとらり 石女氏

右ニハタ市崎家 ぬきまおき井 物の画ニナリ

洛陽折之願寺什物之内一休禪師の筆物書補
中孫ハ紫地牡丹唐草古竹屋所藏ナリ小孫ハ
蘇黄ノ室在ナリ是ヲ物ヲ乳ヲ加テ古岳樂奪に云

口書ニ法然上人ノ一牧起燈文アリテ

傳聞法然活如来 安坐蓮華上品其臺
尼入道同愚癡一輩一牧起清文寂奇哉

南无阿弥陀佛

此外達ノ虚堂ノ如ク唯法然ノ一大事
存多ク我々今自ナリ法然ノ成リカハ覚
薪酬因陀主 休判

應仁二年二月五日

佛佛所ニ

玉服
鉢叩

村上天皇ノ御宇疫癘ノ流行ヲ憐ミテ觀音像ヲ化リテ
茶釜ニテ茶湯ヲ和シ祝言ニ供シ其茶湯ヲ病人ニ与テ
平愈長少ナリ帝感ノマ、吉例トシ毎歳正月元三
空也堂ノ茶釜ニテ茶ヲタテ是ヲ服スレハ年中病氣
ヲサケルトソ今ニ玉服ヲ祝ト云ナリ

空也上人ハ延喜帝第三ノ皇子延喜三年ノ出生ナリ出家シ
玉ヲ后韓馬ノ奥ニ山居仕玉ノ常ニ鹿ヲ愛シ玉ヲシカルニ
平定盛其鹿ヲ討取其後カ子ト成則毒子ヲ具シ
有髪ノ俗新ニシテ天台宗ノ衣ヲ着シ瓢ヲ敲キ上人ノ
製作ノ和讃ヲ祝テ寒中夜毎五三昧式市中ヲ能
徊ニ仕玉フトソ上人定盛法然ニ示シ玉ヲ歌ニ首
山川ノ末ヲ流クも身ヲ捨て玉佛寫心願

極楽をとりて祀りて守りてはとめて至る所なり
 久天禄三年九月十一日奥津黒川郷八葉寺にて入寂之
 行年七十九 今宜也堂境内ニ針殿ト称ズル家
 八軒有皆定成法師ノ苗衣因ニテ常ニ茶釜ヲ製シ業
 徳正茶 金光店 赤松店 東ノ坊
 正徳店 利清店 西蔵店 南ノ坊等也

○
 俳諧尔委——とせ世はよるる
 心の花——いぬぬ——花あきき
 又世は風流り——俳諧——はるる
 みる波志ありて委——とせとせと東花坊

翁ノ曰

俳諧といふことの品あり 寂莫千を
 いつと女色羨者——好ひて兼食のさびと
 ぬの——みんはふを共ふをいふ
 凌る足跡はるるを鷹さるる人をわすれん
 以雅を好むはるるをいふ
 言終ハ虚より好て實をとおこふる
 實より好て虚より好ふ事——を
 又曰
 文雅と文字をとりて好む 以雅を好むを
 好ハ——むらもの好むと

翁許六三問て曰
 画ハ何の半をとりて好むと云て曰画ハ以雅

懐帑 園大納言基香仰ラレシハ懐帑認ムル下ノ揃ハサルヤウニ

認ムルモノナリ山草行草ノ懐帑ハ下ヲ揃ヘルナリ 又懐帑ヲ

書トキ詠キハメテ真ニハ書又モノナリ行草ノ間タルニ

公歸ノ懐帑真ナルハナシタトヒ昏ヲ知サル人昏テモ

御會ニ出ス懐帑ナレハ宗近家ニ准シテ出サス地下ノ懐

帑真ニテ書タル詠ノ字アリ追悼ノ懐帑ヨリ外

真ニテカ、サルモノナリト御教下サレシトアリト云能家ノ

歌代衣 ミナク紙ニテ捲ラユルカ本法ナリはあふおのりや壁の奇袋

此古舟ヲウラニ昏モノナリ 水引ニク、リ柱ニカケ置テ思

ヒツケタル歌ノ版向ヲ入オク袋ナリ昔ハ錦ニテ製ス

今ハ大鷹鳥紙ナリ

芭蕉堂 雙林寺境内西行庵

山家集いみしくころむし山おあまし一房とヤク派上人の

菴室小庵よりてみるにをばとあゆみてよみたる

柴の店とききハ旅ハ記名あれども世におありたむる西行法師

小文庫 けうくはむし山はまきとく僧とくふをて行の

よみせのふし山家集おのせまきりいふあり

恒長あやと先世の坊がけしりれ

け乃乃戸比月や世のまきあまき坊 こそ成

芭蕉翁肖像 おふおむ並に木像八寸計は親像はせ成乃

後のおし門葉のふ老井許六とふ人刻之のひ大津の智

月尼とよふふふのあふ尼中それより智月の従者宗家

尼とよふの世のひ我故郷越の方持くは我中の國の農家

小在て年久くく煉埃小鳥とくを高田金屋氏のな

みたり其後富山の醫生橋氏とよ人是をらめてあ

共ニ傳斗一ノリ抄の後加賀の金符の老良ノ方ハスル
ル者ハ今の半化房軍の門人形ノ故亡命ノ後遺言
小ヨリ半化房の許ハ遷一ル志アリハ芭蕉公拜の付
祭句と基モトトシテウカセ成堂ハトモ安並一ル也
其側ハ南無菴トシテあり是もハ祭句の謂ハヨリテ名ツ
け一之是也半化房軍更々舎ナクテ其許ニテ祭句
寺床交々帯セテそこニ坐スリノ一ノ目出夜夜ノ物
志シマシシススキキトササララシシ像像也及延引引ハハ夜夜也
小ハそれら更々一五老井の古あり刻マシシセセシシ
幣幣もも流流ルル急急ルル大大キキ像像別別夜夜也夜夜也ハハ病氣
月月カカハハいいククククハハ當當又又ハハ出出志志ママ一一ハハハハハハ
十月二日
おねのち像小像へきき菊菊もふふ一一許許六

芭蕉翁碑 美濃の東華坊支考是を書いて建らま一リ
毎季三月十二日墨直一ト云事あり獅子居リ
支流支流屋元具竹再和和の門流門流の人と英徳英徳より上洛上洛して
碑文の墨を修補一當山おのて能涉能涉と信信リリ一其碑文ハ曰
○ 吾昨、伊賀の國小生れて兼應の頃より友堂家小住ル
其の先ハ枕地の當黒當黒ココノヤヤト乃氏乃氏ト松尾松尾ありあり一季時ニ
四十の老とほほハハ武陵武陵の原川原川一廿踐道廿踐道きて世ハ芭蕉の
吾也ハ人のもともとニニ也也一ノ名名也也一ノ道道也也也也今昔
変化変化トト一能涉能涉ハ遊遊死死テ行脚行脚の便便を求む求むトトハハ也也
ナレハ能涉能涉をぬぬれれハハ小小弟弟ハハ泉源泉源ハハ中中ノ夜夜の雨雨小小位位と
こそ富士富士トト一那那の名名小小也也一ノ吾吾ハ一字一字乃乃也也一トハ
古古代代はは人人トト也也一ハハのの辞辞ハハ標標向向もも小小ササトト也也ハ
著著テテ能能皮皮のの傳傳小小世世ととみみそそトト一其其以以ハハ神神ノノ月月の中中ハ

二日なり少少子と遊を湖水の東にありの魂を乞めて
かの本曾寺の苔乃下にのり本乃石を朽さ死す一東華
坊ありけ碑を造る事ハ北阿西行小法道成後ひて道小
七字の心を傳ふる事とあり

あはさるる武蔵のふり 名ありあふ 世小聖條の 先小きふ
人よありあり一世の 言のふいれ 叙多ありて 予の玉川の
みふく英比 ぬのあらそ 汲てしる 六言しふす 多てよふ
伝くは系ハ 不り川や け世を家の を築てねて その後よむ
其れ系ふふ 心は秋風の やうりむむ 其の名をふか 定さくま
なをうしる 人も見え 名を新ははの花とさく 是れの後
及そええぬる

又 芭蕉庵 金福寺一寺あり村 北信川 傍の丘あり サ興村再興ハリ
石碑の文ハ清田文真の撰とて真の長文あり安永丙申五月十三日有

北文 維石不言 謎文以傳

風羅坊 鳥落人惟然の

舊蹟ハ岡崎ありとそ定ふ 今世不承及幻阿弥陀
佛といふ物法原ありは旧蹟を
駐 せり 芭蕉翁於徑徂の時あり 定ふは 後後 のり
其門下惟然 のり 據て朝夕の勤 ハ翁の 發句と 和 授に
て 颯いふ 負 ありて ゆ 心 を 清 く 月 を あり し
こころ 統 ハ 宝 永 八年 二月 九日 あり ち あり け り
遺 詞 あり り 全 鍛 刻 一 翁 の 背 像 と 六 ツ の 石 乃 秋 見
菅 簾 笠 杖 行 硯 宣 囊 紙 繡 袈 裟 ハ 惟 然 の 門 才 播 あり
十 山 小 所 属 ハ 今 ハ 姫 浴 の 北 増 位 山 ハ 風 羅 坊 を 遷 して
堂 を 燃 宮 家 小 安 置 一 側 小 塚 を 築 して の 裏 の 塵 埃
納 て 神 と 是 を 簾 塚 と し 又 其 側 ハ 相 府 の 城 主 乃
發 句 を 石 小 鐫 て 立 たり 事 ハ 頂 上 明 石 名 所 圖 會 不 見 あり

とせ、成葉の風、母も名を幾世母 雅樂候

批把園隨筆

士朗七部大奉の内

○去来曰蕉翁ノ俳諧ヲ學ビ玉ハントナラハ先師在世ノ集其
高第達ノ集ヲヨク見ナラヒ玉フヘシ其内或ハ不審ノ句モ多カ
ルヘシ其不審ノ句ヲ抄捨テ唯面白ト思ヒ玉フ句ヲ取アゲテ學ビ
玉フヘシ或ハ先師眼前ノ俳諧トイハレ其辞アシキ句ノ有マシキモ
ノニモアラズ猿蓑集ニモ先師ノ心ニ叶ハサル如ニツ侍ルヨシ常ニウ
ケ玉ハルマシテ其後ノ集ニハサハカリノ句多カルヘシ第ハ唯今ノ見
玉フ人々ノ眼ニ及ハサル句モ又多カルヘシ然ルヲ其不審ノ句ニナツ
ミテ全篇ノ俳諧ヲ考サル人アリサマウノ人ハ先師ノ直尔ヲ

ウケケル、人ニモ終ニ上達シタルヲミスマシテ后人ニハ有マシキ莫ク
先師目前ノ俳諧或ハ高第達ノ俳諧貴ミト一節ニ其流ニ
ウキヨミ學ヒ玉ハ、自ッテ上達シ後ニハ不審ト思ヒ玉ヘル句モ其
マドヒハルベキナリ

右去来正筆ニテ大伴騏道真ノ所持ナリ

○向曰ソナタノ文字ヨミハカリキ、コナルハナシヨミマウ候ヤ
答マコトニ大事ノモノナリヨミマウハ白ノ起ルヘキ所又ウケテヨム
所ナトノ分別ナリ三光院殿セツノ、シカラレシナリナラヌモナリ
三光院殿今時ノハ校合ヨミト云モノナリト仰ラレシナリ中畧
俳諧ノ上ニモヨミ方大事ナリ連句ナトハヨミ方ニテヨクモアシ
クモ聞ユルモノナリ △淑女高稚カフミニ

○やすきいよもれ、人トおもひ出し、せし

○發句ハ和歌ヲチ、メシモノカフカナラス切字有ヘシ

世を旅り代のくく小田の竹床り
ありくく口はつまもくも秋の風

事ニツニ成テ丈アルヲ發句ト云ナリ

○士芳曰師ノ思フ竹助ニ我心ヲ一ツニナスシテ私意ニ師ノ道ヲ見テ
其門ヲ心得顔ニシテ私ノ道ヲ行夏有門人ヨク已ヲ捍直スヘキ
所ナリ松ノフハ松ニナラフ竹ノ夏ハ竹ニナラフト師ノ辞有シモ私意ヲ
放シヨト云夏ナリ此ナラフト云所ヲ已カ儘ニトリテ終ニナラハカレハ
ナラヘト云ハ物ニ入テ其微ノアラハレテ情感スルナリ句トナル知ナリタト
モノアラハニ言出テモ其モノヨリ自然ニ出ル情ニアラサレハ物ト我ト
ニツニ成テ其情誠ニ至ラス私意ノナスワナリ唯師ノ心ヲハリナ
探シハ其色香我心ノニホヒトナリテ移ルナリ詮義我セオシハ我

探ルニ又私意アリ詮義我空齧盡ルモノハ斬目モ私意ニ放シテ
道アリ只忘ラス詮義我空齧盡スヘシ是ヲ專用ノ事トシテ名ヲ
地振ト云風友ノ中ノ名目トス功者ニ病アリ師ノ辞ニモ俳諧
ハ俳諧ハ三尺ノ童子ニサセヨ初心ノ句コソタノモシケレト度々言出ラシ
モ皆功者ノ二病ヲ示レシナリ又氣ヲ養フト殺すト云フアリ氣志
ヲ殺セハ句ニ入ラス先師モ俳諧ハ氣ニノセテスヘシトアリ又我氣ヲ
カマシテ句ヲシタルヨシト云リ皆氣ヲスカシ生シテ養フノ教ナリ
門人功者ニハマリテ唯ヨキ句セント私意ヲ立テ分別門ニ口ヲ用
テ穿シ草外ルナリ心ノオロカナル所ナリ多年俳諧好タル人ヨリ外
訖言ニ達シタル人早ク俳諧ニ入レ師イヘルヨシアル俳書ニモ見エタリ
師ノ曰學子フフハ常ニアリ席ニ膝テ文屋ト我間ニ髪ヲ入シス
思夏速ニ言出テコ、ニ至テ途ヲ念ナシ文屋引召セハ則及古ナリ

俳名

ツレノハニ曰萬ノ物ニ名ヲツクルト昔ノ人ハ少モ来メス只
有ノマニニマスク附ルナリ此項ハフカク葉ニ又字ヲアラハ
カニトシタルマウニ聞ユルイトムツカシ人ノ名モメナシ又
字ヲツカントスル益ナキナリ何莫モメツラシキヲ来ス
異説ヲユノムハ淺ク人ノ必アルコトナリトソ

殿上人ノ少汰ニ俳諧ハ座奥トノ思カレシニ近頃鬼貫カ向ニ

西ふささあめハ足えぬ芒のか 谷々やるも奇よむ山嶽

ト云有ト申出ケレハ聞人大ニ感ニ叔ハ俳諧モ捨ラシヌモノナリ何人
作ナルヤト有ケレハイタミノ 鬼貫カ向ナルヨシヲ申ケレハアアオソ
ロシノ名マト一座奥ヲカメシトソ 鬼貫後ニ佛サトイ見ト号ス我
翁サトイトハ佛ノアニト列スカル自賛ノ人ニ親ニテ益ナ
シトテ其後ハコミハリヲ絶レシトナリ 可慎ノハ

毎秋ト名アリ是一切經五千余卷ニ秋ノ字ナシト自賛セシトソ

以京ト名アリ是一切ノ言葉ノ香冠ナリト詠リシトナリ

鶴ツキ才ト名アリ是万葉ノ訓ナリ世人トヨクシ後ニ田鶴樹ト改ル

巴龍ト名アリ 巴龍トハ陰莖エノコトナリ

千鹿チカト名ハ 和泉屋六兵衛 若冲ワカサキト云 若サ屋忠兵衛ト云

隋湖スエト名ハ ト云ヲ名トス 大坂ニ造酒ノ銘ナルヲ音ニテ俳名トス

雄山ト名モ 浪花ニテノ酒銘ニ男山ト云ヲ声ニヨリ名トス

十丁トウト名ハ 大谷廣治カ俳名ナリ是市川梅老藏ヨリ送ル

共來見	見 <small>イマミツ</small> 一 <small>ツ</small> 今 <small>イマ</small>	大 <small>イサ</small> 小 <small>ケ</small>	千秋 <small>チウキウ</small>	因香 <small>インカ</small>	隴雄 <small>リウユウ</small>
今朝見	鼓 <small>コ</small> 十 <small>シウ</small>	露 <small>ロウ</small> 青 <small>セイ</small>	苗秀 <small>ヒョウシウ</small>	掠人 <small>リョクジン</small>	牛負 <small>ウシウ</small>
琴 <small>コト</small> 人 <small>ト</small>	越 <small>コト</small> 舊 <small>コト</small>	朝魚 <small>チウイ</small>	三曉 <small>サンキョウ</small>	豐見 <small>トヨミ</small>	松人 <small>マツジン</small>
小夜澄 <small>コヨダシ</small>	不見照 <small>フシヤウ</small>	小夜澄 <small>コヨダシ</small>	千哥見 <small>チンカミ</small>	以上万葉列	
露 <small>ロウ</small> 文 <small>ブン</small>	巴江 <small>ハカ</small>	栢堂 <small>ハクドウ</small>	梅山 <small>バイサン</small>	栢仙 <small>ハクセン</small>	和鳴 <small>ワナウ</small>
荷風 <small>カゼ</small>	可冲 <small>カウチウ</small>	岡 <small>カ</small> 々 <small>ク</small> 田 <small>タ</small>	虹友 <small>ニウユウ</small>	昂 <small>カウ</small> 々 <small>ク</small> 高 <small>カウ</small> 々 <small>ク</small> 如 <small>カウ</small> 々 <small>ク</small> 千里駒 <small>チリキウ</small>	
芥亭 <small>カイテイ</small>	大可 <small>カウカ</small>	素琴 <small>ソキン</small>	祖竹 <small>ソチク</small>	霜皮 <small>シウヒ</small> 栢羅江 <small>ハクラカウ</small>	
右琴 <small>ウヘキン</small> 錦 <small>キン</small>	回樂 <small>クワイラク</small>	福也 <small>フクダ</small>	五雲 <small>ゴウン</small>	三江 <small>サンカウ</small>	輝山 <small>キウサン</small>
西山 <small>シウサン</small>	芝洞 <small>シチドウ</small>	少明 <small>シウメイ</small>	車月 <small>シャグツ</small>	眉山 <small>メイサン</small>	夕天 <small>セウテン</small>
庭五 <small>テイゴ</small>	一丘 <small>イツシウ</small>	露文 <small>ロウブン</small>	梅窓 <small>バイサウ</small>	吐虹 <small>トコウ</small>	桐江 <small>トウカウ</small>
凹 <small>ウツ</small> 凸 <small>ツツ</small>	同雲 <small>ドウウン</small>	龍眠 <small>リウメン</small>	苜谷 <small>モクコク</small>	虹友 <small>ニウユウ</small>	丹丘 <small>タンキウ</small>
丹泉 <small>タンセン</small>	祖竹 <small>ソチク</small>	來之 <small>ライノ</small>	雲松 <small>ウンソウ</small>	花琴 <small>カキン</small>	九百 <small>クハク</small>
文山 <small>ワンサン</small>	福也 <small>フクダ</small>	九花 <small>クウカ</small>	秀水 <small>シウスイ</small>	常山 <small>ジョウサン</small>	永夕 <small>エイセキ</small>

堂號	式好堂	古秋堂	玉照堂	香雪堂
室	向月堂	九如堂	四照堂	
樓	映日樓	東上々	平遠々	秋影々
亭	綠雪亭	半笠々	野香々	雪亭
齋	敦素齋	香松々		
居	有竹居	白石々		
館	吟秋館	映雪々	尚友々	林蕙々
軒	調鶴軒	溶々々	栢帶々	問花々
園	不窺園	影羽平	亦陶々	
	青桐々	長嘯々		

社中表徳

芳岱 季樂

斗笠庵 別号

曉山

関山

又水
四山

士山
丁五
仙山

友徳

虬竹

岸仙

十朗

松園
化彦

昂之

大可
十賀見

一
咄

柳雲
梅雲
鳥雲

文以十一女子替云々

年十嵐 蕪泉 女 女 蘭 引 文

文政十一戊子曆冬

五十嵐應泉北文蘭写之

